

42042  
教科書文庫

4  
810  
41-1943  
200030  
2249

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

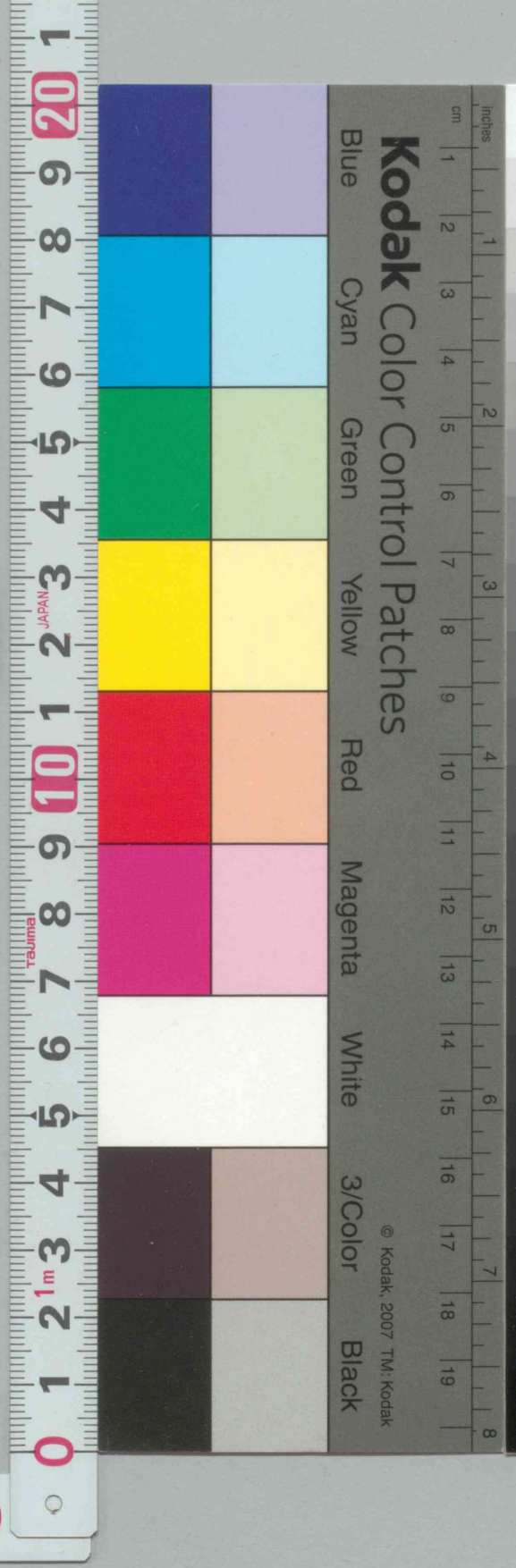


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

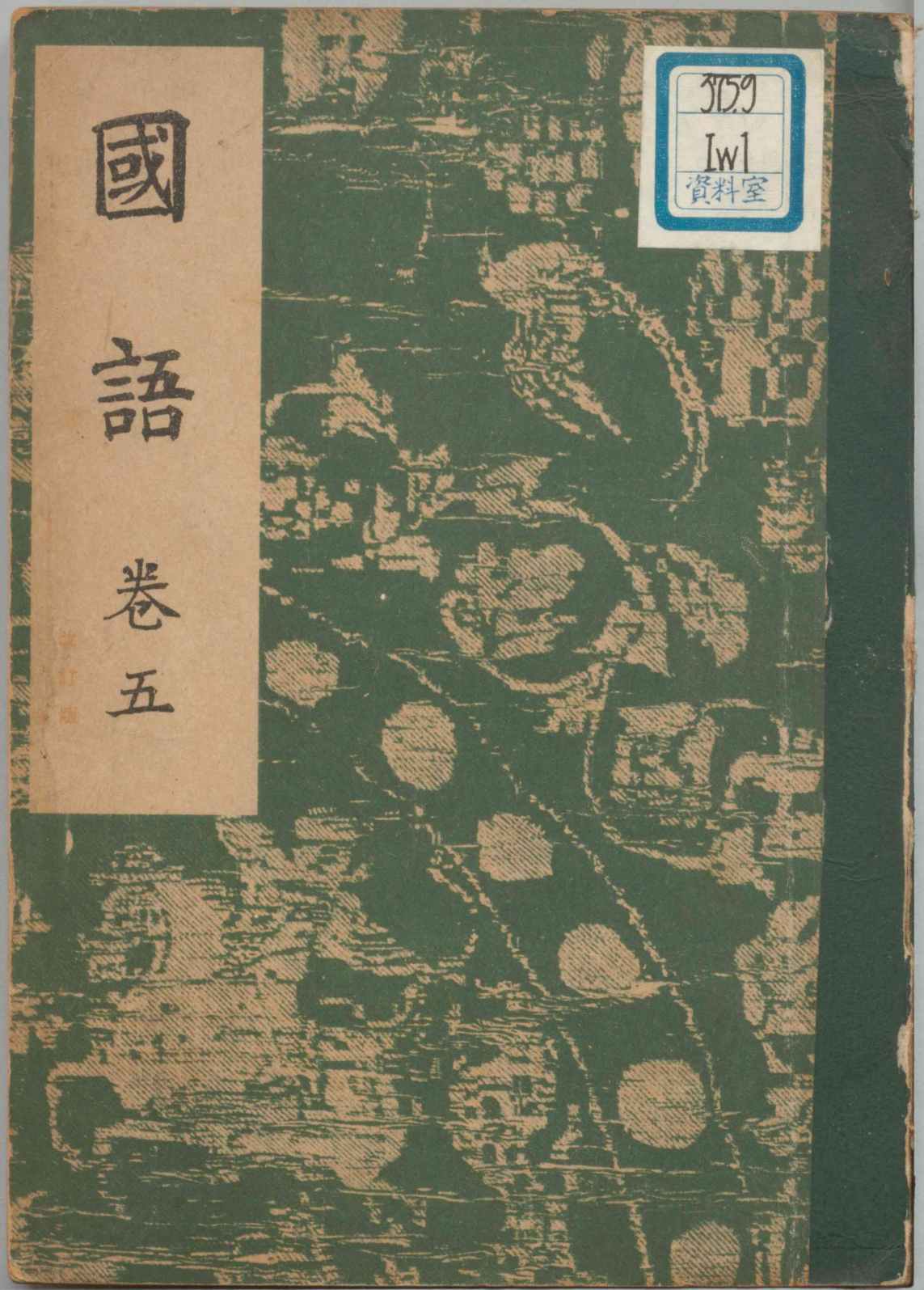
Blue	Cyan	Green	Yellow	Red	Magenta	White	3/Color	Black
------	------	-------	--------	-----	---------	-------	---------	-------

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3159  
Iw1  
資料室

國語 卷五





資料室

3719  
Iw1

日五十月七年八十和昭  
濟定檢省部文  
用科文漢語國校學中

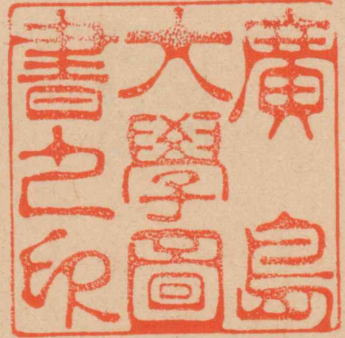
岩波編輯部編

改訂版

國語

中等學校教科書株式會社





國語 卷五 目次

○ 一 道 …………… 芳賀矢一 …… 一

○ 二 道を知れる者 …………… 吉田兼好 …… 九

三 極東に於ける第一日 …………… 小泉八雲 …… 三

四 吉野の奥 …………… 吉田絃二郎 …… 元

○ 五 村上義光 …………… (太平記) …… 元

○ 六 正行の参内 …………… (太平記) …… 二

△ 七 熊王の發心 …………… (吉野拾遺) …… 四

目次

一



○ 八 國上山	.....	良橋	.....
△ 九 墨汁一滴	.....	平賀元曙	.....
○ 一〇 線香花火	.....	正岡子規	.....
○ 一一 非凡なる凡人	.....	吉村冬彦	.....
○ 一二 斑鳩宮	.....	國木田獨歩	.....
△ 一三 乃木大將の殉死	.....	三木露風	.....
○ 一四 故郷の花	.....	徳富蘇峰	.....
○ 一五 小枝の笛	.....	(平家物語)	.....
○ 一六 扇の的	.....	(平家物語)	.....
一七 水郷	.....	北原白秋	.....

○ 一八 兄弟	.....	山本有三	.....
△ 一九 仁王	.....	夏目漱石	.....
二〇 翼	.....	吉江喬松	.....
△ 二一 隅田川の水	.....	島崎藤村	.....
○ 二二 うひ山ふみ	.....	本居宣長	.....
△ 二三 日本の魔法鏡	.....		.....





國語 卷五

一道

芳賀 矢一

芳賀矢一  
國文學者  
文學博士  
東京帝國大學  
教授  
帝國學士院會  
員  
福井市の人  
昭和二年歿  
年六十一

昔刀鍛冶が刀を鍛錬する時は一心不亂であつた。精進潔  
齋一切の邪念を棄てて、神明に感通するまで心を籠め、思を凝  
らした。さういふ至誠と集中があつて、始めて武士の魂とす  
るにふさはしい名刀は鍛へ出されたのである。しかし、これ  
はひとり刀劔鍛錬の上のみではなく、萬事此の境に到らなく  
ては、到底其の奥義は極められない。我々の祖先は、何事にま  
れ、一事を修めようとするに當つては、實に此の覺悟と決心と



をもつて刻苦し勉勵したのである。

これは、古來すべての藝術に、道といふ語が用ひられてゐることによつても明らかである。道とは、神道、儒道、佛道等の語



一 矢 賀 芳

に於ける如く、人の依るべき所の意で、道徳的な意味が主となつてゐて、單なる術とは違ふ。劍術、弓術、馬術などといへば、單に其の技術をいふのであるが、其の極意、奥義をいふ場合には、必ず劍道といひ、弓馬の道といふ。昔は、和歌を學ぶ人は、歌道を學べば直ちに極樂往生が出来る。とまで信じた。それ故、名歌を得られるやうにと住吉明神に

住吉明神  
住吉神社  
大阪市住吉區  
住吉町に在る  
官幣大社  
祭神表筒男命  
外三座  
和歌三神の一

參籠したことなどは、決して珍しくない。歌道は又、日本固有の道であるといふ所から、敷島の道、葦原の道なども名づけられたのである。其の他、書法を書道といひ、茶の湯を茶道といひ、更に香のやうな末技までも香道といつた。音楽はもとより、活花でも、蹴鞠でも、投扇でも、すべて道として尊んでゐる。藝術は指の先や手の先で、唯其の技術を練習するだけでも、勿論或程度までは上達出来るが、それは畢竟生命のない技術に過ぎない。眞の上手になり、奥義を究めるには、心がこれと融合しなければならぬ、一心不亂、其の藝術に専らにならなければならぬ。碁を打つ人でも、碁の外には何も考へないやうにならなければ、上手にはなれぬといふ。碁などはもとより一種の遊戯に過ぎないから、普通の人が其の爲に一切を放擲



するのは考へものだが、碁や將棋の様な遊戯に於てさへ、専門家になるには、それだけの覺悟がなくてはならないといふのである。言ひ換へて見れば、何の業もすべて精神を打ち込まねばならぬといふのである。しかも其の精神たるや、道徳に合して非難する所のない、立派な精神でなくてはならぬ。

凡そ、人の趣味性格は必ず其の動作技能の端にまであらはれるもので、人の筆蹟を見れば其の人物がわかるとは一般にいはれてゐる所である。まして詩歌等の作品の上にあらはれるのは勿論で、歩き方や靴の減り方からさへ、人物を見分けることが出来るといふ人がある。かくの如く、如何なる技藝・藝術にも、其の人の性格があらはれるものであるから、其の技藝・藝術の極致に到らうとするには、上に敍べたやうに、一切の

邪念を棄てて、精進潔齋の心でこれに當らなければならぬのは、蓋し當然の事であらう。茲に至つて、智と徳とは合一するといつても、智から徳が出るのではなくて、徳がなければ眞の智には達せられぬといふのである。此の意味を以て見れば、我等の祖先が小さい藝能までも道と稱し、又其の道の師を同時に人間の師として尊んだことが、甚だ意味深いことに思はれる。

今日の普通教育に於ては、種々の教科目を立て、其の中、修身科以外の科目は單なる知識技能の修得を目的とするかのやうに考へられてゐるが、これは甚だ誤つた考であつて、教育の本義は、やはりすべてを修行として一貫することてなければならぬ。いはゆる道が一切の根柢をなすのでなければならぬ。



ぬ。人間としての根柢を鍛へ、性格を練り磨くことと、知識技能を開発させることが、二つであつてはならぬ。知識技能を磨くことによつて人間を磨き、人間を向上させることによつて知識技能を進めてゆくのである。又、高等教育に於て専門の學業を修めるにも、其の學業をあくまで自分の道と考へ、一身を捧げて之に當らなければ、到底其の蘊奥には達し得られないであらう。學者も、藝術家も、皆それ／＼の學問、藝術を尊び、これに仕へる心でなければならぬ。然るに、動もすればこれを單なる方便と考へ、其の結果、自らも頭の人、手先の人となるのに甘んじてゐる人々があるが、これは學問、藝術の第一義を忘れたもので、學問の人たり、藝術の人たる資格のないものである。

元來、修行といふことは並大抵の事ではない。それで古人は、修行には何より勉強が大切であると信じてゐた。今は勉強といふ語が非常に安價に使はれて、一時間位讀書しても、今日は一時間勉強したなどといふ。一時間の讀書が果して勉強といへるであらうか。古人の勉強はさういふやさしいものではなかつた。彼等は學問、藝術を道として神聖視したので、其の道を得る爲には、眞に骨身を削るやうな刻苦をしたのである。例へば、かの寒稽古を見よ。人が衣を重ね、褥を厚くして寒さを凌ぐ、嚴冬の朝、稽古著一枚で、火の氣も無い道場に、平素よりも激しい稽古をする。寒ければ火鉢を入れ、ストーヴを焚くといふ今日の勉強振りとは非常に違つたものである。しかし、かく寒中朝早く起きて、劍術を學び、柔術を學んだ



所で、術其のものが短時日の間にさう際立つて上達するといふわけではない。むしろ、寒苦を忍んで勉めるといふことに重要な意義が存したので、修行の容易ならぬことを悟つて、これに對する覺悟態度を確にする所以であつた。換言すれば、寒暑に負けず、困苦に打克つて、目ざす道一つに集中し精進しようとする熱心と氣力を鼓舞する所に目的があつたのである。そして、此の熱心と氣力こそ、あらゆる學問藝術を道として成就させる原動力であつたのである。

我々は、我々の祖先がかくの如く、一藝を學ぶにも常に道として其の修行に志し、不惜身命の覺悟を以て志業の大成を期したことを、新に考へてみなければならぬ。

(日本人)

### 二 道を知れる者

吉田 兼好

吉田兼好  
本姓卜部  
出家  
歌人  
元左兵衛尉  
正平五年  
〇一〇〇  
年六十八

高名の木のぼりといひしをのこ、人を掟て、高き木にのぼせて梢をきらせしに、いとあやふく見えしほどはいふ事もなくて、おるゝ時に、軒長ばかりになりて、あやまちすな。心しておりよと言葉をかけ侍りしを、かばかりになりては、飛びおるともおりなん。いかにかくいふぞと申し侍りしかば、その事に候。目くるめき、枝あやふきほどは、おのれがおそれ侍れば申さず。あやまちはやすき所になりて、かならず仕る事に候といふ。

あやしき下藤なれども、聖人の誠にかなへり。鞠も、難き所を蹴出してのち、やすくおもへば必ず落つと侍るやらん。



龜山殿 現京都市右京區嵯峨に在つた離宮  
 後嵯峨上皇の御造營  
 大井川 現京都府愛宕郡に發源し嵯峨・嵐山附近を流れて桂川となり淀川に入る  
 大井 嵯峨附近の大井川沿岸の地  
 宇治 現京都府久世郡宇治町及び宇治郡宇治村附近  
 水車で著名  
 城陸奥守泰盛 安達泰盛  
 秋田城介・陸奥守 弘安八年（一九四五）歿

龜山殿の御池に大井川の水をまかせられんとて、大井の土民におほせて、水車をつくらせられけり。多くの錢を賜ひて、數日にいとなみ出してかけたりけるに、大方めぐらざりければ、とかくなほしけれども、終にまはらでいたづらに立てりけり。さて宇治の里人を召してこしらへさせられければ、やすらかにゆひてまゐらせたりけるが、思ふやうにめぐりて、水にくみ入るゝことめでたかりけり。  
 よろづに、其の道を知れる者はやんごとなきものなり。

城陸奥守泰盛はさうなき馬乗りけり。馬をひきいでさせけるに、足をそろへて鬩をゆらりと超ゆるを見ては、「これはいさめる馬なり」とて鞍をおきかへさせけり。また、足をのべて鬩に蹴あてぬれば、「これは鈍くしてあやまちあるべし」とて乗らざりけり。  
 道を知らざらん人、かばかり恐れなんや。

吉田と申す馬乗の申し侍りしは、馬ごとにこはきものなり。人の力あらそふべからずと知るべし。乗るべき馬をば先づよく見て、強き所、弱き所を知るべし。次に、轡鞍の具にあやふき事やあると見て、心にかゝる事あらば、其の馬を走すべからず。この用意を忘れざるを馬乗とは申すなり。これ祕藏の事なり」と申しき。  
 (徒然草)

徒然草  
 二卷  
 吉野朝時代に成つた隨筆

二 道を知れる者

二



小泉八雲

ラフカザオ、

ハーン

文學者

東京帝國大學

講師

イギリス人

後日本に歸化

明治三十七年

歿 年五十五

三 極東に於ける第一日

小泉 八雲

何もかも言ひやうもなく面白く珍しいので、何處へなり、否、何處も残さず曳いて廻れと、氣違ひみた手眞似で知らせる外、車夫に何一つ意志を通ずることも出来ない。こんな状態で日本の街々を通つて見る快い驚を經驗して、始めて眞に東洋に來たといふ感じ——今まであれ程書物の上で讀み、あれ程長く空想に描いてゐながら、これまでは全然知らなかつたのに等しいこの極東に來たといふ感じ——に打たれる。このむしろ平凡な事實を始めて十分に意識することにさへ、物語めいた面白味がある。しかも私の場合には、この意識は、この日の神々しいばかりの美しさのために、言葉にいひがたい程美化

されてゐた。

日本の春に特有な冷氣と、白雪を戴いた富士の峯から寄せて來る風の波とで冷やかにされた朝の空氣には、一種の名狀しがたい魅力がある。この魅力は、何かこれといふ色合よりも、むしろ非常に柔らかい明澄さ、極めて遠方にある物象をも驚くばかりはつきりと見せる、心もち青味を帯びた大氣の、異常な明澄さによるものやうである。日光はやんはり心持よいほどの暖さである。人力車はといへば、およそこれほど小さい、乗心地のよい乗物がまた他にあらうとは思はれぬ。草鞋をはいた車夫の、上下に躍つてゐる、白いマシユルムのやうな恰好の笠越しに見える街の見通しは、いつまで見ても飽きさうもない魅力をもつてゐる。

マシユルム  
草



一切のものが妖精の世界のものやうに見える。藍色の屋根を戴いた小さな家々、紺の暖簾を下げた小さな店頭、紺の著物をきて微笑を含んだ小さな人々など、總べての物も人も、小さくて、奇異で、神祕的だからである。この幻を破るものは、時折通る丈の高い西洋人と、片言の英語を使つた廣告看板だけである。が、かういふ不調和は、却つて現實性を強調するだけである。この興味ある小さな町の魅力を著しく減殺しはしない。和漢の文字を染め出した美しい神祕的な旗や紺暖簾が、はてしなく翻つたり揺らいだりしてゐる間をすかして、街上を遙かに見通すと、初は、總べてがたゞ好ましく珍しい混亂として感じられる。それは一見して目につくやうな建築上裝飾上の法則がなく、建物は一軒々々それ／＼の美しさをもつて

ゐて、一つとして他と同一なのはなく、且皆途方もなく斬新だからである。しかし、その界限に一時間も過してみると、これらの低い、軽さうな家屋の構造には、ある一般的な方式のある事が臍氣ながら見えてくる。街路面よりもかなり高く張られた床に疊を敷いた小店の共通の様式もわかってくるし、表號の文字は、暖簾の上に浮動してゐるのも、金や漆で塗つた看板の面に光つてゐるのも、一般に垂直の排列である事がわかってくる。

一般の服装に於て優勢を占めてゐる紺色は、また商店の暖簾に於ても同様に首位を占めてゐることが目に立つ。尤も、晴れやかな青や白や赤など、他の色もちよ／＼飛んではゐる。それから労働者の衣服にも、暖簾と同様、例の不思議な文



字を書いてあるのが目につく。どんな唐草模様でも、これ程の趣が出るものではない。裝飾のためさまざまに形を工夫して書かれたこれらの表意文字には、意味のない圖案には到底見られぬ、生命のある均齊がある。かういふ文字が職人の法被の背中に、紺地に眞白く、遠くからでもよく讀める程大きく染め出してあるのは、粗末な衣服にひどくもの／＼しい趣を興へるものである。

最後に、まだ事物の不思議さに目をまはしてゐる中に、やがてこれらの町々の驚くべき美しさの大部分は、一に、黒や白や青や金色の漢字や假名文字が、門柱や障子に至るまで、到る處にふんだんに用ゐられて、あらゆる物を美化してゐるのよゝることが、啓示のやうに閃いてくる。

表意文字が日本人の頭腦に興へる印象は、字母乃至字母の連結が西洋人の頭腦に興へるものとは、全く類を異にしたものである。日本人の頭腦にとつては、表意文字は躍如たる繪畫である。生命があつて、物を言ひ身振をする。しかも日本の町には、満目かやうな活きた文字——絶叫して眼に訴へる字形、顔の如く微笑したり、顰蹙したりする言語——が充ち満ちてゐるのである。

我々の生命なき文字と比べてかゝる文字が如何なるものであるかは、極東に住んだ經驗のない人々には、到底理解せられない。日本又は支那から輸入される書物の印刷文字でさへも、その同一文字が、裝飾用として、又彫刻用として、或は更に最も卑近な廣告用として、さまざまに工夫して書かれた場合、



どれ程美しくなり得るものか、その暗示さへも與へることが出来ないからである。

私はその夜夢を見た。無数の異様で神祕な漢字の文句が、悉く同一の方向に私の側を疾走して行く。白い字、黒い字が、看板の表に、障子の面に、草鞋穿きの男の背に載つてゐる。字といふ字が悉く意識的生命を有して、生きてゐるやうだ。七節蟲の如く奇怪で、昆蟲が四肢を動かすやうに部分々々を動かしてゐる。私は車輪の音を立てない幻の人力車に乗つて、低い、狭い、輝いた町の間を走つて行く。そして、走り、行く車夫の、大きな、白い、マシニールムのやうな恰好の帽子が、絶えず私の前で上下に躍つてゐる。

(未だ知られざる日本の面影)

吉田絃二郎

名は源次郎

英文學者 小

説家

佐賀縣の人

明治十九年生

吉野

吉野山

奈良縣吉野郡

の南部に横た

はる大峯山脈

の一支部

三輪

同縣磯城郡三

輪町

畝傍

同縣高市郡畝

傍町

吉野川

三重・奈良兩

縣界に發源し

吉野山の北を

流れて和歌山

縣に入り紀の

川となる

#### 四 吉野の奥

吉田絃二郎

大和めぐりは廢墟の遍路である。滅びたものを弔ふ挽歌の旅である。氣をつけて見れば、この村はづれにも、かしの一筋道にも、檜笠の大和遍路の姿が見える。

三輪、畝傍、なつかしい名である。麥畑、水田の中の古い町、雨が降るならば更に情趣が深いことであらう。

畝傍からは電車になり、道は吉野へと上り坂になつてゐる。小山また小山の間を縫うて走る。碧珠のやうな吉野川の流れを見出すと、間もなく電車の終點である。

吉野川の長い鐵橋を渡ると、やがて人家が盡きて急坂にかかる。左手に川を隔てて、上市のいかにも落ちついた町の姿



伊勢  
伊勢國  
現三重縣の内

が眺められる。

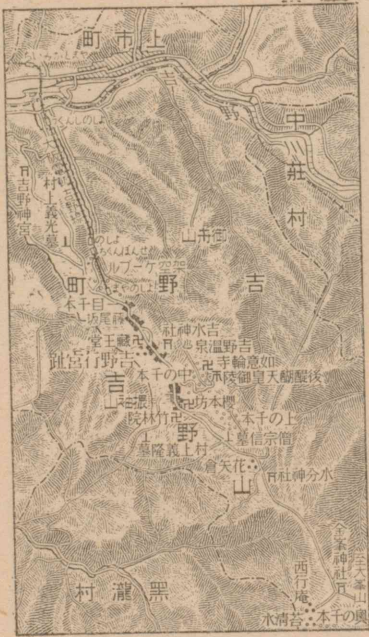
吉野川の上流に青い山が聳えてゐる。伊勢の山である。幾聯の筏が靜かに美しい吉野川の流れを下つて行く。道は山の腰をめぐり、川を失ひ、川を見出す。急坂を登りつくしては、やがて深い谿に沿うて緩やかな道となる。老木の櫻が道を掩ふまでに咲いてゐる。道は尾根を傳うて一上一下して走る。一目千本中の千本はちやうど見頃であつた。

山の脊を一筋の赭土道が走つてゐる。道を挟んで吉野の宿場があり、宿場の家々を埋めて雲の如き花が薫つてゐる。谿も峯も花である。

義臣村上義光の墓は道傍の小高い丘の上にある。このあたりから、いよゝゝ吉野の花らしい花の眺が始る。「歌書より

村上義光  
通稱彦四郎  
護良親王に從  
ひ忠を致した  
元弘三年(一  
九九三)歿  
歌書よりもの句  
各務支考

西行庵  
西行庵住の地  
と傳へられる  
如意輪寺  
淨土宗の寺  
吉野朝の勅願  
寺



吉野附近圖

も軍書に悲し芳野山の跡も、このあたりから始るのであらう。吉野山は花の山であり、同時に數々の人間哀史の山である。吉野朝五十年の御所跡に立てば花は旅人の悲しみをこめて

散りに散る。

宿に著いたのは

五時過ぎであつた。

出来ることなら、今

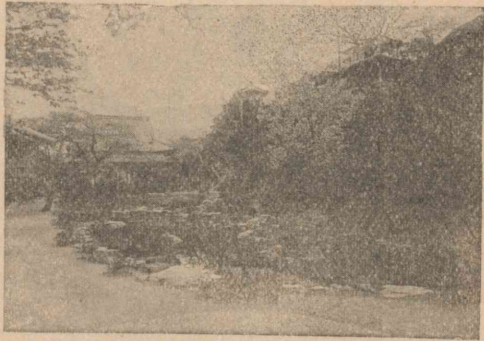
日のうちに奥の西

行庵をたづね、明日

は如意輪寺あたりの花を見て、なるべく人の少い間に山を下りたいと思つたので、宿に著いて休む間もなく、更に山を登ることにした。



天王橋  
竹林院の西南  
に在る  
吉野三橋の一  
宗信法印  
吉水院(現吉  
水神社)の僧  
吉野朝の勳皇  
家



竹林院の庭園

櫻本坊竹林院の前を通りすぎて天王橋あたりからは、さすがに昔のまゝの山の宿の面影が残つてゐる。道は再び急峻になる。宗信法印の輪塔が暗い木立のなかに、冷たい苔につゝまれて立つてゐる。

宗信法印の墓から二三町登つたところで、奥から木をおろして来る柚人たちに逢つた。丸木をそのまゝに車輪にした小さな車の上に、吉野の杉材を載せて山を下つて来るのであつた。一間物二間物とあるが、いづれも氣持のいゝほどよく、桎が通つてゐる。

高野山  
和歌山縣伊都  
郡に在る  
古義眞言宗の  
總本山金剛峯  
寺の寺界  
金剛山  
奈良縣と大阪  
府とに跨がる  
金剛山脈の一  
峯  
葛城  
葛城山  
金剛山脈の一  
峯

佐藤忠信  
源義經の臣  
文治二年(一  
八四六)歿  
年二十六

「高野山は見えますか。」

「この上の山から見えます。あれが金剛山葛城……それか  
らもうすこし左手に高野が見える筈です。」

私は柚人に教へられたまゝ山を登つて行つた。幾度か立  
ちどまつては麓の花をながめた。谿は暮れかゝつてゐた。

花は霞の如く、山の脊を走る道と谿とをつゝんでゐた。吉野  
川であらう、暮色につゝまれた幾重の山のかなたに銀の如く  
光つて、やがて落日とともに暮れていつた。

そこいらにはまだ梅が咲いてゐた。櫻はまだ堅く蕾んで  
ゐた。花矢倉は急峻な坂を擁して俯瞰する峠の足溜りであ  
る。昔は山門のやうなものであつたのであらうか。佐藤忠  
信が吉野の僧兵を防ぎ矢した場所であると傳へられてゐる。



燕村  
與謝燕村  
俳人 畫家  
攝津國(大阪府)の人  
天明三年(二四四三)歿  
年六十八

更に二三町行つた所に水分神社みくまりがある。古風な建物である。軒も庇も欄干も苔むしてゐる。水分神社から更に坂を攀ぢて數町歩いたところで私は若い二人づれの柚人に逢つた。「これから奥の西行庵まで行けませうか。」  
「まだ十五六町はありますがな。それに、行きついてもあつちには暗い山の中ですから、今日は山を下つた方がいゝでせう。」  
私は柚人と別れた。そこいらには、櫻の老木が竝木を作つてゐた。私は暫くそこに突立つてゐた。春の夜の満月が伊勢の山に出た。落日が高野あたりの山のかなたに沈んでいつた。私は暫くの間、吉野の奥の満月と落日とを、たゞひとり靜かに味はふことが出来た。燕村の、菜の花や月は東に日は西にの句を思ひ出さざるを得なかつた。

西行  
俗名佐藤義清  
歌人  
建久元年(一八五〇)歿  
年七十三  
芭蕉  
松尾芭蕉  
俳人  
蕉風俳諧の祖  
伊賀國(三重縣)の人  
元祿七年(二三五四)歿  
年五十一  
役の行者  
役の小角  
修驗道の開祖  
藤原朝頃の人

私は西行庵を斷念して、ひたぶるに吉野の奥の満月の姿に眺め入つた。谿は霧に包まれてしまつた。月の光はまだ谿の底までは届かなかつた。風の音も絶えた。私は坂道の傍らにしやがんだ。そこの一筋の道を、嘗ては西行が歩み、芭蕉が辿つたであらう。さう考へると薄闇の中の徑も尊かつた。翌る朝早く、私は昨日歩いた坂道を再び花矢倉の方へ登つて行つた。麓は一面の靄の海であつた。奥の千本に近く金峯神社がある。役の行者の道案内を勤めたといふ山神の木像が、石磴の下に祀られてある。中老の宮守が一人、焚火をしてゐた。  
「お早うございます。」私は聲をかけてその男に近づいて行つた。そのあたりからは殆ど人の影を見ることもない。



「けさはひどい霜でしたなあ。しかし花は時を知つてゐるもので、昨日まで雪がつもつてゐたと思ひましたが、もうほころびかけて來ましたよ。」

七八人の大峯詣りの道者たちが裏の山道を下つて來て、一緒に火にあたつた。私はその人達に別れて、更に急な坂を登つて行つた。小鳥の聲が聞えて來た。

大峯山への道から右に岐れて、杉の木立の中を四五町も歩いて谿に下つたところに苔清水がある。水は、暗い木立をくぐつて、五六尺の高さから落ちてゐる。水の傍らに、梅室の手に成つた、芭蕉の「露とくく」の句碑がある。碑は苔につまられて、文字のみ黒く沈んでゐる。何となく物體ない心持もしたが、苔清水を手に掬んで漱ぎ且飲む。

大峯山  
大峯山  
吉野山の南に  
在る大峯山脈  
の一山衆  
修驗道の靈地  
梅室  
櫻井梅室  
俳人  
加賀國(石川  
縣)の人  
嘉永五年(二  
五二)歿  
年八十四  
露とくくこ  
ころみに浮世  
すゝがばや  
(松尾芭蕉)

とくくの水から、更に南へ一町許り、山の腰に沿うて狭い道を行くと、急に半段許りの地が展けて、周圍には樅が繁り、殊



西行庵

に櫻の老樹が多い。そのやゝ平な林の片隅に、山を負うて西行庵がある。辛うじて人一人の膝を容るゝに足るほどの草の庵である。眺むるに、佇むに、たとゝ涙流るゝほどの尊さを覺える。こゝに來て、西行の「吉野山やがて出てじと思ふ身を花散りなばと人や待つらむ」の歌を思へば、西行の悲しい決心が眼に見えるやうで、草も清水も歎歎してゐるやうな氣がする。六尺の大男西行が、吉野の奥の土にしがみついて泣い



てゐる悲しさが、旅人の腸にこたへて来る。恐らく芭蕉も、そこに佇んで泣いたであらう。何といふ偉大な二つの侘人の影が、嘗てその草の上に投げられたことであらう。

西行庵の草の屋根に達するほどの丈高い馬酔木が一本、目立つて見える。その雪のやうな花が濡縁の端に咲きこぼれてゐた。何時かは庵の主が旅から歸つて来るであらうことを待ちわびてゐるかのやうに、馬酔木の花は白く尊く寂しかった。そこには、西行が人生の寂寞をじつと見つめてゐたであらう日の静けさが今も漂うてゐた。奥の櫻は冬枯のまゝで、草の霜もまだ消えてはゐなかつた。

私は再びとく／＼の清水を掬ひ、如意輪寺の方へと志して山を下つた。

(白日の窓)

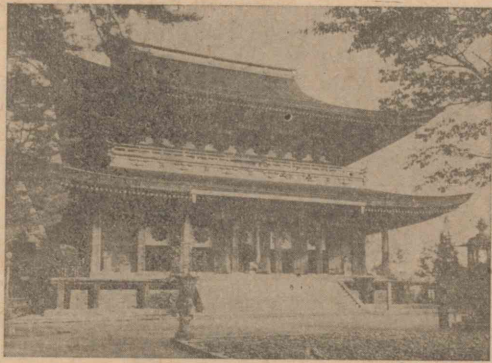
### 五 村上義光

元弘三年  
一九九三年  
後醍醐天皇の  
御代  
二階堂出羽入道  
道蘊  
二階堂貞藤  
北條高時の臣  
大塔宮  
護良親王  
後醍醐天皇の  
皇子  
建武二年(一  
九九五)薨  
御年二十八  
夏箕川  
現奈良縣吉野  
郡中莊村來摘  
附近を流れる  
吉野川の一部

元弘三年二月十六日、二階堂出羽入道道蘊六萬餘騎の勢にて、大塔宮の籠らせ給へる吉野の城へ押寄する。夏箕川の川淀より城の方を見あげたれば、峯には白旗赤旗錦の旗、深山風に吹き亂されて、雲か花かと怪しまる。麓には、數千の官軍、兜の星を耀かし、鎧の袖を連ねて、錦繡を布ける地の如し。峯高うして道細く、山嶮しうして苔滑かなり。されば、幾十萬騎の勢にて攻むるとも、たやすく落ちぬべしとも見えざりけり。同じき十八日の卯の刻より、兩陣互に矢合はせして、入れ替へ入れ替へ攻め戦ふ。官軍はものに馴れたる案内者どもなれば、此處のつまり、彼處の難所に走り散つて、攻め合はせ開き



勝手の明神  
山口神社  
藏王堂の東南  
に在る



吉野藏王堂

合はせ、散々に射る。寄手は死生不知の坂東武者なれば、親子討たるれども顧みず、主從滅ぶれども屑もつかりともせず、乗り超え、乗り超え攻め近づく。夜晝七日が間、息をもつがず相戦ふに、城中の勢三百餘人討たれければ、寄手も八百餘人討たれにけり。況や、矢に中り石に打たれて死生の堺を知らざる者は、幾千萬といふ數を知らず。血は流れて草芥を染め、尸は横たはつて路逕を塞ぐ。されども城の體すこしもよわらねば、寄手の兵、多くは退屈してぞ見えたりける。さる程に、搦手の兵、思ひも寄らず、勝手の明神の前より押寄

藏王堂  
吉野山に在る  
天台宗の寺  
金峯山寺の本堂

せて、宮の御座ありける藏王堂へ打つてかゝる。大塔宮、今は遁れぬ所なりと思し召し切つて、赤地の錦の鎧直垂に、緋緘の鎧のまだ巳の刻なるを透間もなく召され、龍頭リウダウの兜の緒をしめ、三尺五寸の小長刀を脇に挟み、劣らぬ兵二十餘人、前後左右に立て、敵の群つて控へたる中へ走り懸り、東西を拂ひ、南北へ追ひまはし、黒煙を立てて切つてまはらせ給ふに、寄手大勢なりと雖も、僅かの小勢に斬り立てられ、木の葉の風に散るが如く、四方の谷へさつとひく。

敵ひけば、宮は藏王堂の大庭に竝み居させ給ひて、大幕打揚げて、最後の御酒盛あり。宮の御鎧に立つ所の矢七筋、御頬先、二の御腕、二箇所を突かれさせ給ひて、血の流るゝこと斜ならず。然れども立つたる矢をも抜かれず、流るゝ血をも拭はれ



漢楚の云々  
沛公且從、百餘騎、見羽鴻門、羽留沛公、與飲、使項莊入進爲舞、請以劍舞、因擊沛公、項伯亦拔劍起舞、常以身翼蔽沛公、莊不得擊、張良出告、樊噲以事急、噲撞盾直入、頭搶地、視羽皆盡裂、  
(十八史略)

ず、數皮の上に立ちながら、大杯を以てさし受け、三度傾けさせ給へば、木寺相模、四尺三寸の太刀の鋒に敵の首を刺し貫ぬき、戈鋌、劍戟飛ぶこと雷光の如くなり、磐石の巖を降らすこと春雨に相同じ。然りと雖も、天帝の身には近づかて、修羅彼が爲に破らると舞ひたる有様は、漢楚の鴻門に會せし時、楚の項伯と項莊とが劍を抜いて舞ひしに、樊噲庭に立ちながら、帷幕をかゝげて、項王を睨みし勢も、かくやと見えて勇みあり。大手の合戦事急なりと覺えて、敵身方の鬨の聲相交りて聞えけるが、げにも其の戦に自ら相當ること多かりけりと見え、村上彦四郎義光、鎧に立つ所の矢十六筋、枯野に残る冬草の風に伏したる如くに折りかけて、宮の御前に參つて申しけるは、大手の一の城戸、いふがひなく攻め破られ候間、二の城戸に

漢の高祖云々  
楚圍漢王於滎陽、紀信曰、事急矣、請誑楚、乃乘漢王車、出東門、曰、食盡、漢王出降、楚人皆之、城東觀、漢王乃得出、西門去、項羽燒殺紀信、  
(十八史略)

支へて數刻相戦ひ候ひつるが、御所中の御酒盛の聲のすさまじく聞え候について參つて候。敵已にかさに取つて、身方氣疲れ候ひぬれば、この城にて防ぐことは今は叶はじと覺え候。未だ敵の勢を餘所へ廻し候はぬ先に、一方より打破りて、一先づ落ちて御覽あるべしと存じ候。但し、跡に残り留りて戦ふ兵無くば、御所の落ちさせ給ふものなりと心得て、敵いづくまでもつゞきて追ひ懸け參らせんと覺え候。恐ある事にて候へども、召されて候錦の御鎧直垂と御物具とを下し賜はつて、御諱の字を冒して敵を欺き、御命に代り參らせ候はんと申しければ、宮、争てかざる事はあるべき。死なば一所にてこそともかくもならめと仰せられけるを、義光、詞をあらゝかにして、「かゝる淺ましき御事や候。漢の高祖、滎陽に圍まれし時、紀信、



高祖の眞似をして楚を欺かんと請ひしをば、高祖之を許し給ひ候はずや。これ程にいふがひなき御所存にて、天下の大事を思し召し立ちけることこそうたてけれ。はや御物具をぬがせ給ひ候へ」と申して、御鎧の上帯を解き奉れば、宮げにもとや思し召しけん、御物具鎧直垂まで脱ぎかへさせ給ひて、我若し生きたらば、汝が後生を弔ふべし。共に敵の手にかゝらば、冥途までも同じ岐に伴なふべし」と仰せられて、御涙を流させ給ひながら、勝手の明神の御前を南へ向かつて落ちさせ給へば、義光は二の城戸の高櫓に上り、宮の御後影を遙かに見送り参らせ、遠く隔たらせ給ひぬるを見て、今はかうと思ひければ、櫓の狭間の板を皆切り落して身をあらはになし、大音聲を揚げて名乗りけるは、天照大神の御子孫、神武天皇より九十六代

天の川  
現吉野郡天川

村  
吉野山の南方  
に在る

太平記

四十卷

吉野朝時代に  
成つた軍記物  
語  
作者未詳

の帝後醍醐天皇第三の皇子、一品兵部卿親王護良、逆臣の爲に犯され、恨を泉下に報ぜんが爲に、只今自害する有様見置きて、汝等が武運忽ちに盡きて、腹を切らん時の手本にせよ」といふまゝに、鎧を脱ぎ、櫓より下へ抛げ下し、錦の鎧直垂の袴ばかりに、練貫の二つ小袖をおし袒ぎ、白く清げなる膚に刀を突き立て、左の脇より右のそば腹まで一文字に掻切つて、腹の綿つかんで、櫓の板になげつけ、刀を口に銜へて、うつ臥しに臥したりける。

大手搦手の寄手之を見て、すはや、大塔宮御自害あるとて、我先に御首を賜はらんとて、四方の圍みを解いて一所に集る。その間に宮は差違へて、天の川へぞ落ちさせ給ひける。

(太平記)



正行  
楠木正行

正成の長子

吉野朝の忠臣

正平三年(二〇〇八)歿

年二十三

安部野の合戦

正平二年安部

野(現大阪市

住吉・西成兩

區の内)に於

て正行が細川

顯氏等の足利

勢を破つた戦

渡邊の橋

現大阪府北・

東兩區間に在

つた淀川の橋

四條繩手の合戦

正平三年四條

繩手(現大阪

府中河内郡繩

手村附近)に

於て正行が高

師直と戦つて

戦死した戦

兩度の合戦

藤井寺及び阿

部野の戦

京勢

足利氏の軍勢

將軍

足利尊氏

左兵衛督

足利直義

尊氏の弟

高武藏守師直

足利家の宿臣

淀

現京都府久世

郡淀町附近

八幡

現同府綴喜郡

八幡町

次郎正時

正成の第二子

四條繩手の戦

に戦死

四條中納言隆資

藤原隆資

吉野朝の忠臣

先皇

後醍醐天皇

第九十六代

### 六 正行の参内

安部野の合戦は霜月二十六日の事なれば、渡邊の橋よりせき落されて流るゝ兵五百餘人、かひなき命を楠木に助けられ、河より引き上げられたりけれども、秋の霜肉を破り、曉の氷膚に結んで、生くべしとも見えざりけるを、楠木情ある者なりければ、小袖を脱ぎ替へさせて身を暖め、薬を與へて疵を療治せしむ。かくの如く四五日皆勞りて、馬に乗る者には馬を引き、物具失へる者には物具を著せ、色代してぞ送りける。されば、敵ながらも其の情を感じける人は、今日より後、心を通はせんことを思ひ、其の恩を報ぜんとする人は、やがて彼の手に屬して、後、四條繩手の合戦に討死しけるとぞ聞えし。

さて、今年兩度の合戦に、京勢無下に打負けて、畿内多く敵の爲に侵し奪はれ、遠國また蜂起しぬと告げければ、將軍左兵衛督の周章、たゞ熱湯を執つて手を洗ふが如し。「今は末々の源氏、國々の催し勢などを向けては叶ふべしとも覺えず」とて、執事高武藏守師直、越後守師泰兄弟を兩大將にて、四國中國、東山、東海、二十餘箇國の勢をぞ向けられける。

京勢雲霞の如く、淀八幡に著きぬと聞えしかば、楠木帶刀正行、舍弟次郎正時二人は、一族若黨三百餘騎にて、十二月二十七日、吉野の皇居に参つて、四條中納言隆資卿を傳奏にて申しけるは、「亡父正成、厄弱の身を以て大敵の威を碎き、先皇の宸襟を休め、まるらせ候ひし後、天下程なく亂れて、逆臣西國より攻めのぼり候ひし間、危きを見て命を致すところ、かねて思ひ定め



攝津國  
現大阪府及び  
兵庫縣の内  
湊川  
現兵庫縣武庫  
郡に發源し神  
戶市を流れて  
大阪灣に注ぐ  
河内  
現大阪府の内

候ひけるかに依つて、つひに攝州湊川にして討死仕り候ひを  
はんぬ。其の時、正行十一歳に成り候ひしと、戦の場へは伴な  
ひ候はで、河内へ返し遣はし、死に残り候はんずる一族の若黨  
等を扶持し立て、朝敵を滅し、君を御代に即けまゐらせよと申  
し置きて死にて候。しかるを、今正行正時すでに壯年に及び  
候ひながら、此の度、我と手を碎く合戦を仕り候はずば、且は亡  
父が遺言に違ひ、且は武略のいふかひなき、謗に落つべく覺え  
候。有待の身思ふに任かせぬ習にて候へば、自然我等病に冒  
されて早世仕ることも候ひなば、たゞ君の御爲には不忠の臣  
となり、父の爲には不孝の子となるべきにて候間、今度師直師  
泰に對して、身命を盡くし合戦を仕つて、彼等が頭を正行が手  
にかけて取り候か、正行正時が首を彼等に取りられ候か、其の二

主上  
後村上天皇  
第九十七代

つの中に戦の雌雄を決すべきにて候へば、今生にて今一度君  
の龍顔を拜しまゐらせ候はん爲に、參内仕つて候と申しも敢  
へず、涙を鎧の袖にかけて、義心其の氣色にあらはれければ、傳  
奏未だ奏せざりける先に、まづ直衣の袖をぞぬらされける。  
主上乃ち南殿の御簾を高く捲かせて、龍顔殊に麗しく、諸卒  
を照臨あつて、正行を近く召して、以前兩度の戦に勝つことを  
得て、敵軍に氣を屈せしむ。叡慮先づ憤を慰する條、累代の武  
功返すくも神妙なり。大敵今勢を盡くして向かふなれば、  
今度の合戦は天下の安否たるべし。進退度に當り、變化機に  
應ずることは、勇士の心とする所、進むべきを知つて進むは時  
を失はざらんが爲なり、退くべきを見て退くは後を全うせん  
が爲なり。朕汝を以て股肱とす。慎んで命を全うすべし」と



仰せ出されければ、正行頭を地につけて、兎角の勅答に及ばず、たゞこれを最後の参内なりと思ひ定めて退出す。

正行、正時、和田新發意、同新兵衛以下、今度の軍難儀なれば一足も引かず、一處にて討死せんと内々約諾したりける兵百四十三人、先皇の御廟に参つて、今度の軍難儀なれば討死仕るべき由の暇を申し、如意輪堂の壁板に、各己が名字を過去帳に書き連ねて、其の奥に、

かへらじとかねて思へば、梓弓なき數にいる名をぞとどむる

と一首の歌を書き留め、逆修の爲と覺しくて、各鬢の髪を少し押切つて、佛殿に投げ入れ、其の日吉野を打出でて、敵陣へとぞ向かひける。

(太平記)

和田新發意  
和田賢秀  
楠木氏の一族  
新兵衛  
和田正朝  
賢秀の弟  
共に四條細手の戦に戦死  
先皇の御廟  
後醍醐天皇の御陵塔尾陵  
現奈良縣吉野郡吉野町に在る  
如意輪堂  
塔尾陵の西に在る

赤松光範  
攝津守護職  
正中、中足利義隆に從つて吉野を犯した  
弘和元年(二〇四一)歿  
津の國  
攝津國  
左馬頭正儀  
楠木正儀  
正成の第三子  
元中歿  
住吉の職  
未詳

### 七 熊王の發心

大夫判官赤松光範が津の國の固めなりける時、左馬頭正儀に度々はかられけるを口惜しく思ひこめて、過し侍りけるに、往ぬる住吉の戦に討たれて失せし宇野の六郎といひしが、子に熊王といひけるが、まだ幼き時、光範にいひけるは、正儀はわが爲にも親の敵にて候へば、如何にもして討ち侍らん。河内へ越えて正儀に仕へ侍らんに、幼く候へばなどか心を許し申さぬことの無かるべき。たとへ心を許すことの侍らずとも、七とせ八とせ程も仕へ候はば、そのうちには討ちぬべき便りのいかでなからん。御暇をこそ賜はらめと涙を流せば、光範もいとあはれとは思ひながら、幼ければ敵の國へやらんも心



阿部野  
阿倍野・安部  
野とも書く

赤坂の城  
現大阪府南河  
内郡赤阪村に  
在った

許なし。又わが命に代りて討たれし者の子なれば、形見とも思ふべければと強ひて留め給ひけれども、少しおとなしくなりなば、よも近づけ給はじ。幼くありなん時参りてこそと頻りに望みければ、力及び給はで、常に身を放ち給はざりし刀を賜ひて、これにて本意を遂げよとて、阿部野まで人あまた添へてやらせけり。

それよりは、我にひとしき童一人を具して赤坂の城に行きて、そのほとりに佇みてありけるを、兵庫介忠元が見つけて、いかなる人にかおはすらんと尋ぬるに、我は大夫尉光範の侍にて、宇野の六郎といひける者の子に熊王といへる者にて候。父にて侍る六郎は往にし住吉の戦に討たれて候を、一門にて侍る備後守が我を追ひ撃ちて領地を奪ひ候へども、光範と心

を合はせ候へばせんかたなくて、いかなる寺へも入り侍りて、僧法師にもなり、父の跡を弔ひ候はんがためにさすらひ侍るといひけるを、あはれと聞きて、まづわが方に伴なひてさまさま勞りて後に、正儀にありつる事を語りて、幼くは候へど心のさかしくして、など申すに、あはれがり給ひて、召し寄せ給へり。

もとより情ある人なりければ、熊王も思ひつきて、親の仇をも忘れにけるにや、よく官仕へにけり。十五ほどになりければ、河内の國にて、すこしき所を知らせんといひけれども、恥ある一矢をも射候ひてこそとて、辭しにけり。

あくる年の春、父が七めぐりに當りけるに思ひつきて、今宵正儀を討つて、父の手向にもし、光範の心をも安め奉らんと思



和田和泉守  
和田正武  
楠木氏の一族  
吉野朝の忠臣  
吉野殿  
吉野の朝廷

ひ立ちてありけるに、その日御前に召して、今日は吉日にてあるなれば、元服せよかし」とて、和田和泉守に髻とりあげさせて、和田小次郎正寛と名乗らせ、吉野殿より賜はせける鎧を賜ひければ、涙を袖にかけて喜ぶ。夜に入るまで正儀の御前に在りけるが、またふと思ひ出でて、討ち奉らんならば今宵こそと思ひて、膝を押直して正儀に目をかくれば、年比の情深かりしこと、今日の元服のことなど思ひつゞけて、いかで情なく討ち奉らんと思ひかへして心をしづむれば、父の敵といひ、譜代の主君の仇といひ、一方ならねばと思ひ定めけれども、何心もなくわたらせ給ふ有様を見れば、御痛はしくて堪へかねけるにや、廣縁に出でて聲をあげて泣き叫ぶを、人々も正儀も覺束なく思ひ給うて、障子を開き見給へるに、伏し沈めるさまのた

往生院  
現大阪府中河  
内郡繩手村に  
在る淨土宗の  
寺

だに見えざりければ、いかにか」と問はせ給ひければ、ありつる心のうちを申して、「とにかくに、君のため父のために自ら死なんより外は候はず」とて刀を取り直せば、ありつる人ども皆涙にくれてありながら、「いかでさはあらんと」とりつきてはたらかせねば、力およばで、その刀にて髻押切り、往生院にてかたちをかへ、君より賜はせける名なればとて、正寛法師とぞいひける。

寺の傍らに草の庵を結びて、もしも心の變ることのありもやせんとて、往生院の門の外へは出でずして行ひてありけり。光範より賜はりける刀は、ありし有様をくはしく書きそへて返しけるとかや。いとあはれなりけることにこそ。

(吉野拾遺)

吉野拾遺  
三卷  
吉野朝時代に  
成つた逸話集  
作者未詳



八國上山

良寛

俗名山本文孝

禪僧

歌人

越後國(新潟

縣)の人

天保二年(二

四九一)歿

年七十四

國上山

現新潟縣西蒲

原郡國上村に

在る

良寛庵住の地

良

寛

むらぎもの心たのしも春の日に鳥のむらがり  
遊ぶを見れば  
あしびきの國<sup>くぐま</sup>上の山をこえ來れば山時鳥をち  
こちに鳴く

秋の日に光りかがやくすすきの穂この高屋  
にのぼりて見れば

高砂の尾の上の鐘の聲きけば今日のひと日は  
暮れにけるかも

里べには笛や太鼓の音すなりみ山はさはに松  
の音しつ

飯乞ふと里にも出でずなりにけり昨日も今日  
も雪の降れば



橘曙覽  
歌人 勸皇家  
越前國(福井  
縣)の人  
明治元年  
年五十七

橘 曙 覽

たのしみは珍しきふみ人にかりてはじめ一ひ  
らひろげたるとき

たのしみはまれに魚煮て兒等皆がうましうま  
しといひて食ふとき

すくすくと生ひ立つ麥に腹すりて燕飛び來る  
春の山畑

平 賀 元 義

平賀元義  
歌人  
備前國(岡山  
縣)の人  
慶應元年(二  
五二五)歿  
年六十六

日竝<sup>ナカナ</sup>べてきのふもけふも見つれども猶見のあ  
かぬ庭の梅かも

わたつみの潮の八百路の八潮路ゆ吹きくる風  
は涼しくありけり

あかねさす日は照りながらくれなるの淺原山  
ゆ雪のちりくる

淺原山  
現岡山縣都窪  
郡菅生村に在  
る



正岡子規  
名は常規  
俳人 歌人  
松山市の人  
明治三十五年  
歿年三十六

九 墨汁一滴

正岡子規

夕餉したゝめ了りて、仰向けに寝ながら左の方を見れば、机の上に藤を活けたる、いとよく水をあげて、花は今を盛りの有様なり。艶にも美しきかなと獨りごちつゝ、そゞろに物語の昔などしぬばるゝにつけて、あやしくも歌心なん催されける。斯の道には日頃うとくなりまさりたれば、おぼつかなくも筆を執りて、

瓶にさす藤の花ぶさみじかければたたみの上にとどかざりけり  
瓶にさす藤の花ぶさ一ふさはかさねし書の上に垂れたり

藤なみの花をし見れば奈良のみかど京のみかどの昔こひしも

藤なみの花をし見れば紫の繪具取り出て寫さんと思ふ

藤なみの花の紫繪にかかばこき紫にかくべかりけり

瓶にさす藤の花ぶさ花垂れて病の牀に春暮れんとす

おだやかならぬふしもありながら、病のひまの筆のすさみは、日頃稀なる心やりなりけり。をかしき春の一夜や。

春雨霏々。病牀徒然。天井を見れば風車五色に輝き、枕邊



を見れば瓶中の藤紫にして一尺垂れたり。ガラス戸の外を見れば、満庭の新緑雨に濡れて、山吹は黄漸く少く、牡丹は薄紅の一輪先づ開きたり。やがて繪具箱を出させて、紫綠黄薄紅、さていづれの色をかくべき。

病室のガラス障子より見ゆる所に、裏口の木戸あり。木戸の傍ら、竹垣の内に一叢の山吹あり。此の山吹もとは隣なる童の四五年前に一寸許りの苗を持ち來て、戯れに植ゑ置きしものなるが、今ははや繩もてつかぬる程になりぬ。今年も咲き咲きて、既になかば散りたる景色をながめて、うたゝ歌心起りければ、原稿紙を手に持ちて、

裏口の木戸のかたへの竹垣にたばねられたる

山吹の花

水汲みに往き來の袖の打觸れて散りはじめたる山吹の花

わが庵をめぐらす垣根隈もおちず咲かせ見まくの山吹の花

春の日の雨しき降ればガラス戸の曇りて見えぬ山吹の花

ガラス戸のくもり拭へばあきらかに寝ながら見ゆる山吹の花

(子規全集)



吉村冬彦

本名寺田寅彦

物理學者

隨筆家

理學家

東京帝國大學

教授

帝國學士院會

員

東京市の人

昭和十年歿

年五十八

### 一〇 線香花火

吉村冬彦

夏の夜に、小庭の縁臺で子供等の弄ぶ線香花火には、大人の自分でも強い誘惑を感じる。これによつて、自分の子供の時代の夢が甦つて来る。今は此の世にない、親しかつた人々の記憶が喚び返される。

はじめ先端に點火されて、たゞかすかに燻つて居る間の沈黙が、これを見守る人々の心を將に來るべき現象の期待によつて緊張させるに丁度適當な時間だけ、繼續する。次には、火藥の燃燒がはじまつて、小さな焰が牡丹の花瓣のやうに放出され、その反動で全體は振子のやうに搖動する。同時に、灼熱された熔融塊の球が、段々生長して行く。焰が止んで、次の火

花の段階フェーズに移るまでの短い休止期レスタ期が、又名狀し難い心持を與へるものである。火の球は、かすかなものの沸えたぎるやうな音を立てながら、細かく震動して居る。それは、今にも迸り出ようとするエネルギーが内部に渦卷いて居る事を感じさせる。突然、火花の放出が始る。眼に止らぬ速度で發射される微細な火彈が、眼に見えぬ空中の何物かに衝突して碎けてもするやうに、無數の光の矢束となつて放散する。その中の一片は、又更に碎けて第二の松葉、第三、第四の松葉を展開する。此の火花の時間的並びに空間的の分布が、あれよりもつと疎であつても、或は密であつてもいけないであらう。實に、適當な步調と配置で、しかも十分な變化をもつて、火花の音樂が進行する。



テンポ  
速度

ラルゴ  
最も緩徐に  
アンダンテ  
稍緩く  
アレグロ  
急速に  
プレステイシモ  
最も速く  
デクレッシェンド  
漸次弱く  
いづれも音楽  
の術語  
フィナーレ  
終曲

此の音楽のテンポは段々に早くなり、密度は増加し、同時に一つ一つの火花は短くなり、火の箭の先端は力弱く垂れ曲る。最早爆裂するだけのエネルギーのない火弾が、空気の抵抗のためにその速度を失つて、重力のために拋物線を畫がいて垂れ落ちるのである。莊重なラルゴではじまつたのが、アンダンテ・アレグロを経て、プレステイシモになつたと思ふと、急激なデクレッシェンドで、哀れに淋しいフィナーレに移つて行く。私の母は此の最後の段階を「散り菊」と名づけて居た。本當に單瓣の菊の萎れかゝつたやうな形である。「ちりぎく、ちりぎく、ちりぎく、かういつてはやして聞かせた母の聲を思ひ出すと、自分の故郷に於ける幼時の追懐が鮮明に喚び返されるのである。あらゆる火花のエネルギーを吐き盡くした火球は、

ソナタ  
奏鳴曲

脆く、力なく、ぼとりと落ちる。そして此の火花のソナタの一曲が終るのである。あとに残されるものは、淡く、はかない、夏の宵闇である。

實際、此の線香花火の一本の燃え方には、序破急があり、起承轉結があり、詩があり、音楽がある。

線香花火の灼熱した球の中から火花が飛び出し、それが又二段三段に破裂する。あの現象が如何なる作用によるものであるかといふ事は、興味ある物理学上並びに化學上の問題であつて、若し詳しくこれを研究すれば、その結果は自然にこれ等の科學の最も重要な基礎問題に觸れて、その解釋は何等かの有益な貢獻となり得る見込がかなり多くありさうに考へられる。それで、私は十餘年前の昔から、多くの人にこれの



研究を勧誘して來た。特に地方にでも住んで居て、十分な研究設備をもたないで、何かしらオリジナルな仕事が見たいといふやうな人には、いつでも此の線香花火の問題を提供した。併し、今日迄、未だ誰も此の仕事に著手したといふ報告に接しない。結局、自分の手許でやる外はないと思つて、二年許り前に手を著けはじめて見た。ほんの少しやつて見ただけで得られた僅かな結果でも、それは甚だ不思議なものである。少くも、これが將來一つの重要な研究題目になり得るであらうといふ事を認めさせるには十分であつた。

此の面白く有益な問題を、從來誰も手を著けずに放棄してある理由が自分には分かりかねる。恐らく、文献中に見當らない、即ち誰も未だ手を著けなかつたといふ事自身以外に、理由は見當らないであらうと思はれる。併し、人が顧みなかつたといふ事は、此の問題がつまらないといふ事には決してない。

若し、西洋の物理學者の間に、我々の線香花火といふものが普通に知られて居たら、恐らく疾くの昔に、一人や二人はこれを研究したものがあつたらうと想像される。そしてその結果が、もし何か面白いものを生み出して居たら、我が國でも、今頃線香花火に關する學位論文の一つや二つは出來てゐたであらう。かういふ自分自身も、今日迄棄ててはおかなかつたであらう。

近頃、フランス人で、刃物を丸砥石で砥ぐ時に出る火花を研究して、その火花の形狀からその刃物の鋼鐵の種類を見分け



る事を考へたものがある。此の人にも提出したら、線香花火の問題も案外早く進行するかも知れない。併し、出来る事なら、線香花火はやはり日本人の手で研究したいものだと思ふ。

西洋の學者の掘り散らした跡へ、遙々後ればせに鑽石の缺けらを捜しに行くもいゝが、我々の脚下に埋れて居る寶も忘れてはならないと思ふ。併し、それを掘り出すには、人から笑はれ、時に狂人扱ひにされる事を覺悟するだけの勇氣が入用である。

(寺田寅彦全集)

一一 非凡なる凡人

國木田 獨歩

國木田獨歩  
名は哲夫  
詩人 小説家  
千葉縣の人  
明治四十一年  
歿 年三十八

僕の子供の時からの友人に、桂正作といふ男がある。今年二十四で、今は横濱のある會社に技手として雇はれ、専ら電氣事業に従事してゐるが、先づ此の男程類の違つた人物はあるまいと思はれる。

非凡人ではない。けれども凡人でもない。さりとして偏物でもなく、奇人でもない。非凡なる凡人といふのが最も適評かと僕は思つてゐる。

僕は、知れば知る程此の男に感心せざるを得ない。感心するといつたところで、秀吉とか、ナポレオンとか、其の他の天才に感心するのとは違ふ。此の種の人物は千百歳に一人も出



るか出ないかであるが、桂正作の如きは、平凡なる社會が常に産出し得る人物である、また平凡なる社會が常に要求する人物である。であるから、桂のやうな人物が一人殖えれば、それだけ社會が幸福になるのである。僕が桂に感心するのは、此の意味に於てである。また僕が桂を非凡なる凡人と評するのも、此の故である。

僕等がまだ小學校に通つてゐる時分であつた。ある日曜に、僕は四五人の學校仲間と小松山へ出かけ、戦争の眞似をして、我こそ秀吉だとか義経だとか、十三四にもなりながら、馬鹿げた腕白を働いて大あばれに、遂に喉が渴いて來たので、山のすぐ麓にある桂の家の庭へ裏山からどや／＼と駈け下りて、いきなり井戸端に集つて、われがちにと水を汲んで飲

んだ。

すると、二階の窓から桂が顔を出して、此方を見てゐる。僕はこれを見るや、來ないかと呼んだ。けれども彼はいつにない眞面目くさつた顔つきをして、頭を横に振つた。腕白の方でも人並のことをしてのける桂が、不思議に此の日は出て來ないので、僕等も強ひては誘はず、其のまゝまた山に駈け登つてしまつた。

騒ぎくたびれてみんなちり／＼に我が家へと歸り去り、僕は一人桂の家に立寄つた。黙つて二階へ上つて見ると、桂はテーブルに向かひ、椅子に腰をかけて、一心に何か讀んでゐる。尤もテーブルといつても、粗末な日本机の兩脚の下に繼臺をした品物、椅子も足繼の下に箱を置いただけのものである。



西國立志編  
スマイルズ原  
著「セルフ・ヘ  
ルプ」の譯  
中村敬宇譯述  
明治四年刊

けれども桂は眞面目に此の工夫をしたのである。学校の先生が、日本流の机は衛生に悪いといった言葉を成程と感心して、すぐこれだけのことを實行したのである。そして其の後常に此の椅子・テーブルで彼は勉強してゐたのである。テーブルの上には教科書其の他の書籍を丁寧に重ね筆墨の類まで決して亂雑に置いてはない。彼は日曜の好い天氣であるにも關らず、何の本か脇目もふらず読んでゐるのであつた。僕は其の傍に行つて、何を讀んでゐるのだといひながら見ると、洋綴ぢの厚い本である。「西國立志編だ」と答へて顔を上げ、僕を見た其の眼ざしはまだ夢の醒めない人のやうで、心はなほ書籍の中にあるらしい。

「面白いかね。」

「うん、面白い。」

日本外史  
二十二卷  
源平二氏から  
徳川氏に至る  
武家時代史  
頼山陽著  
文政十年（二  
四八七）成

「日本外史とどつちが面白い」と問ふと、桂は微笑を含んで漸く我に復り、何時もの元氣のよい聲で「それは此の方が面白いよ。日本外史とは物が違ふ。昨夜僕は梅田先生の處から借りて來て讀みはじめたけれども、面白くて止められない。僕は如何しても一冊買ふのだ」といつて、嬉しくて堪らない風であつた。

其の後桂は遂に西國立志編を一冊買ひ求めたが、其の本といふのは粗末至極な洋綴ぢで、一度讀み了らない中に既にばらばらになりさうな代物ゆゑ、彼はこれを丈夫な麻絲で綴ぢ直した。

此の時、桂も僕も數へ年の十四歳であつた。桂は一度西國



立志編の美味を知つて以後は、何度此の書を読んだか知れない。殆ど諳誦するほど熟讀したらしい。そして今日と雖も、常にこれを座右に置いてゐる。

げに桂正作は活きた西國立志編といつてよからう。桂自身もさういつてゐる。若し僕が西國立志編を読まなかつたらどうであつたらう。僕の今日あるのは全く此の書のお蔭だ」と。西國立志編を読んだものは、幾百萬人あるか知れないが、桂のやうに、余を作りし者は此の書なり」と明言し得る者が果して幾人あるだらうか。

小學校を卒業するや、僕は中學校に入つて暫く故郷を離れたが、桂は家の都合でさういふわけにゆかず、周旋する人があつてある銀行に出ることになり、給料四圓か五圓か二里の

道を朝夕往復することになつた。

間もなく冬季休暇になり、僕は歸省の途に就いた。故郷近く來ると、五六間さきを、古ぼけたとんびを著、古ぼけた手提鞆を持つて、靜かに坂を登りつゝある少年がある。其の姿がどうも桂に似てゐるので、「桂君ぢやないか」と聲をかけた。後を振向いて破顔一笑したのは、まさしく桂である。

「冬季休暇になつたのか。」

「どうだ、君はまだ銀行に通つてゐるか。」

「うん、通つてゐるけれども少しも面白くない。」

「どうして。」

「どうしてといふ譯もないが、君なら三日と辛抱が出来ないだらうと思ふ。第一、銀行業からして僕の目的ぢやないのだ。」



もの。」

「何が君の目的なんだ。」

「工業で身を立てる決心だ。僕は毎日此の道を往復しながら色々考へたが、發明に越す大事業はないと思ふ。」

ワットやスチヴンソンやエヂソンは彼が理想の英雄である。そして西國立志編は彼の聖書である。

僕の黙つて頷くのを見て、桂は更に言葉をついでいつた。

「だから僕は來春は東京へ出ようかと思つてゐる。」

「東京へ？」と驚いて問ひ返したのに答へて、

「さうさ、東京へ。旅費はもう出來たが、彼地むかふへ行つて三月ばかり食へるだけの金を持つてゐなければ困るだらうと思ふ。だから僕は父に頼んで、來年の三月までの給料は全部僕が貰

ワット  
1736—1819  
イギリスの發  
明家  
スチヴンソン  
1781—1848  
イギリスの發  
明家  
エヂソン  
1847—1931  
アメリカの大  
發明家

ふことにした。だから四月早々出立できるだらうと思ふ」といふ。

桂の計畫は總べて此の筆法である。彼は随分少年にありがちな空想を描くけれども、計畫を立ててこれを實行する上に於ては、少年の時から今日に至るまで少しも變らず、一定の順序を立てて、一步一步と著々實行して、遂に目的通りに成就するのである。無論これは西國立志編の感化でもあらう。けれども一つには、彼の性情が祖父に似てゐるからだと思はれる。彼の祖父の非凡な人であつたことを今こゝに詳しく述べることは出來ないが、其の一つをいへば、眞書太閤記三百卷を寫すのに十年計畫を立て、遂に見事寫し了つたことがあ

眞書太閤記  
三百六十卷  
實錄小説體の  
豊臣秀吉傳  
栗原柳庵編

る。僕も桂の家でこれを實見したが、今でも其の氣根の強い



のに驚いてゐる。桂は確に此の祖父の血を享けたに違ひない。若しくは、此の祖父の感化を受けたのだらうと思ふ。

途上種々話しながら夕暮に歸宅し、其の後は毎日のやうに會つて、互に將來の大望を語り合つた。冬季休暇が終り、僕が中學校の寄宿舎に歸るために故郷を出立する前の晩、桂が訪ねて來た。そしていふには、今度會ふのは東京だらう。三四年は歸郷しない積りだから」と。僕も其の積りで別れを告げた。

明治二十七年の春、桂は計畫通りに上京し、東京から二三度手紙をよこしたけれど、何時も無事を知らせるばかりで、別に著京後の様子は告げてない。また故郷の者も、誰も桂がどうして暮してゐるかを知らない、父母すら知らない。たゞ何人

も疑はないことが一つあつた。それは、桂正作は必ずや何等かの計畫を立てて、其の目的に向かつて著々歩を進めてゐるだらうといふことである。

僕は三十年の春上京した。そして宿所がきまるや、早速桂を訪ねた。此の時二人は既に十九歳になつてゐた。

午後三時頃であつた。僕は築地某町を隅から隅まで探して、漸くのこと桂の住家を探しあてた。とある横町の、貧しげな家ばかり竝んでゐる中に挟まつた九尺間口の二階屋、其の二階が「活ける西國立志編」君の巢であつた。

「桂君といふ人が貴方の處にゐますか。」

「へい、いらつしやいます。あの、書生さんでせう」との宿の者

築地  
東京市京橋區  
築地



の挨拶。聲を聞きつけて、みし／＼と二階を下りて来て、「やあ」と現れたのは、一別以來三年會はなかつた桂正作である。

足も立てられないやうな汚い畳を二三枚歩いて、狭い急な階子段を登り、通された座敷は六畳敷で、煤けた低い天井が頭を押し、畳も黒く壁も黒い。けれども黒くないものがある。それは書籍である。

桂ほど書籍を大切にすることは少い。彼は如何なる書物でも決して机の上や座敷の真中に放置するやうなことはない。かういふと、桂は書籍ばかりを大切にすることを必ずしもさうではない。彼は身のまはりのもの總べてを大事にする。

見ると机もかなり立派で、本箱もさまで黒くない。机の上

を見ると、教科書其の他が例の如く整然と重ねてある。其の他周囲の物總べてが皆其の處を得て、きちんとしてゐる。室が粗末で、黒く暗澹としてゐるのを憂ふる勿れ。桂正作は其の主義と、其の性情とに依つて、これらの總べてを純潔にして高貴、感歎すべく畏敬すべきものと化してゐるのである。

彼は例の如く、いとも快活に胸臆を開いて語つた。僕の間ふがまに、上京後の彼の生活を、恥ぢもせず、誇りもせず、率直に、詳しく話して聞かせた。

彼ほど虚榮心の少い男は珍しい。其の境遇に處し、其の信ずる所を行うて、それで満足し、安心し、そして勉勵してゐる。彼は決して自分と他人とを比較しない。自分は自分だけのことをして、運命に安んじ、運命を開拓しつゝ、進んで行く。僕



は聞いてゐる中に益、彼に對する尊敬の念を深くせざるを得なかつた。

彼は計畫通り三箇月分の糧を蓄へて上京した。けれども、彼は決して坐してこれを食ふ男ではなかつた。何が面白い職を得たいものと、先づ東京中を足に任かせて巡り歩いた。日清の間が切迫して來るや、彼はすぐ新聞賣になり、號外で意外の金を儲けた。

かくて其の年も暮れ、二十八年の春になつて、彼は首尾よく工手學校の夜學部に入學し得たのである。

且問ひ且聞いてゐる中に夕暮近くなつた。

「飯を食ひに行かう」と桂は突然いつて、机の抽斗から手早く褌口を取り出して懷へ入れた。

「何處へ」と僕は驚いて訊ねた。

「飯屋へさ」といつて桂は立ちかけたので、

「いや、飯なら僕は宿へ歸つて食ふから心配しないほうがよいよ。」

「まあそんなことをいはないで一緒に食ひ給へ。そして今夜は此處に泊り給へ。まだ話が澤山残つてゐる。」

僕も其の意に従ひ、二人して宿を出た。路の二三町も歩いたが、桂は其の間も愉快に話しながら、國元のことなど聞き、今年の中に一度故郷に歸りたいといつてゐた。けれども僕は桂の生活の様様から察して、三百里外の故郷に往復することの、到底いふべくして行ふべからざるを思ひ、別に氣にも留めず、歸れたら一度歸つて父母を見舞ひ給へ位の軽い挨拶をし



ておいた。

「此處だ」といつて、桂は先に立つて繩暖簾を潜つた。僕は喫驚して暫時ためらつてゐると、内から、

「おい、君と呼んだ。しかたがないから入ると、桂は程よき場所に陣取つて、笑みを含んで此方を見てゐる。見まはすと、桂の外に四五名の労働者らしい男がゐて、長い食卓に著いて飯を食ふ者、酒を飲む者、殊の外靜肅である。

「僕は三度々々此處で飯を食ふのだ」と桂は平氣でいつて、君は何を食ふか。何でも出来るよ。」

「何でもいゝ、僕は。」

「さうか、それでは」と桂は女中に向かつて二三品命じたが、其の名は符牒のやうで僕にはわからなかつた。暫くすると、刺

身煮肴煮染汁などが出、飯を盛つた茶碗と香の物が出た。桂は旨さうに食ひ始めたが、僕は何となく食ふ氣にならなかつたのを、無理に食ひ始めると、思はず涙がこみ上げて來た。ああ、此の飯は、此の有爲なる、勤勉なる、獨立自活して自ら教育しつゝある少年が、労働して儲け得た金で、心からの馳走をしてくれる好意ではないか。それを何ぞや、不味さうに食ふとは。桂は此處で三度の食事をするではないか。これを厭々ながら食ふ自分は彼の竹馬の友といはれようか。さう思つて僕は思はず涙を呑んだのである。そして僕は急に胸がすがすがして、桂と共に楽しく食事をして繩暖簾を出た。

其の夜二人は薄い布團にくるまつて、夜の更けるのも知らず、小さな豆ランプの覺束ない光の下で、故郷のことや、他の友



のことや、將來の望などを語り合つた。

其の後、桂と僕とは互に往來してゐたが、早くも其の年の夏季休暇が來た。すると一日、桂が僕の下宿に來て、

「僕は故郷に歸つて來ようかと思ふ。實はもう決めてゐるのだ」といふ意外な言葉である。

「それはいゝけれども君……」と僕はすぐ旅費のことを心配して口を開くと、

「實は金も出來てゐるのだ。三十圓ばかり貯蓄してゐるから、往復の旅費と土産物とで二十圓あつたらよからうと思ふ。三十圓つかつてしまふと、後で困るからね」といふ。

僕は今更ながら彼の用意の程に感じ入つた。彼の話によると、二年前から既に歸省の計畫を立てて、其の積りで貯金し

てゐたとのことである。

そこで僕も大いに歡んで彼の歸國を送つた。彼は二年間の貯蓄の三分の二を平氣で擲つて、錦繪を買ひ、反物を買ひ、母や弟や、親戚の女子供を喜ばすべく、欣々然として新橋を立つた。

翌三十一年、彼はめでたく學校を卒業し、電氣部の技手として横濱のある會社に給料十二圓で雇はれた。其の後今日まで五年になる。其の間彼は何をしたか。たゞ其の職分を忠實に勤めただけか。さうではない。

彼には弟が二人あつて、二人とも手に合はない突飛者で、一人を五郎といひ、一人を荒雄といふ。五郎は桂が横濱の會社に出たと聞くや、國元を飛び出して東京に來た。桂は五郎の

新橋  
舊新橋驛  
東海道線の舊  
起點で東京市  
芝區汐留に在  
つた



爲に諸所奔走して、或は商店に入れ、或は家僕としたけれど、五郎は到る處で失敗し、到る處を逃げ出してしまふ。桂は根氣よく世話をしてゐたが、遂に五郎を自分の傍に置き、種々に訓戒を加へ、西國立志編を繰返して讀ませ、そして工手學校に入れた。僅かの給料で自ら食ひ、弟を養ひ、三年の間辛苦に辛苦を重ねた結果は三十四年に至つて現れ、五郎は技手となつて、今は東京芝區の某會社に雇はれて眞面目に働いてゐる。荒雄もまた國を飛び出した。今は桂と五郎と二人で、此の弟の教育に苦心してゐる。

今年の春のことであつた。夕暮に僕は横濱に桂を訪ねると、宿の者が、桂さんはまだ會社ですといふから、會社の様子も見たく、其の足で會社を訪うて見た。

桂の仕事をしてゐる場所に行つて見ると、一本の太い鐵柱を擁して數人の人が立つてゐて、桂は一人其の鐵柱の周圍を幾度となく廻つて、熱心に何事かしてゐる。最早電燈が點いて、白晝の如く此の一群の人を照らしてゐる。人々は黙して桂のするところを見てゐる。機械に狂の生じたのを桂が檢分し、修繕してゐるのらしい。

桂の顔様子。彼は無人の境にゐて、我を忘れ、世界を忘れ、身も魂も今其の爲しつゝある仕事に打込んでゐる。僕は桂の容貌のかくまでに眞摯なのを見たことがない。僕は一種莊嚴な感に打たれて、思はずそこにたゞずんだ。

(獨歩全集)



三木露風

名は操

詩人

兵庫縣の人

生

明治二十二年

斑鳩宮

現奈良縣生駒

郡法隆寺村に

在つた聖德太

子の宮殿

法隆寺東院夢

殿はその宮址

上宮王

聖德太子

廢戸豐聰耳皇

子

用明天皇の皇

子

推古天皇の攝

政皇太子

推古天皇三十

年(一一八二)

薨

御年四十

西域  
主として今の  
中央アジア地  
方

一二 斑鳩宮

三 木露風

やまとの國

上宮王の

いましし斑鳩いかるがの宮、

青葉して夏は今さかりなり。

古きこのあとどころ、

我は立ちむかししのべば、

白き日のかげろひ照れる中に

まぼろし青し。

まだ稚き若草の文明日本に

吹きめぐる西域のかをりは、

やはらかき詩の佛陀を

金色にただよはせぬ。

「日出づる處の天子

日没する處の天子に

書を致す」と

かの太子は宣らす、おどそかに、國使をして。



覺智 高麗の人  
 聖徳太子の儒  
 教の師  
 慧慈 高麗の僧  
 聖徳太子の佛  
 教の師  
 憲法 憲法十七條  
 推古天皇十二  
 年御制定  
 法隆寺 法相宗大本  
 山の一  
 現法隆寺村に  
 在る  
 聖徳太子の御  
 建立

覺智や慧慈等の聖徒は  
 衣を翻して來り、  
 藝術興り、文明すすみ、  
 憲法制定せられて朝政革る。

美しき法隆寺は  
 千三百餘年の昔に建ちけらし。  
 嗚呼、巨いなる日本のこころを示す  
 僧伽藍摩。

見つつ我が

涙をながす、  
 東天の菩薩太子、  
 君がせし功績のあとを。

やまとの國  
 上宮王の  
 いましし斑鳩の宮、  
 青葉して、夏は今さかりなり。

〔出所〕  
 詩集「青き樹  
 かぶ」



徳富蘇峰

名は猪一郎

著述家

大阪毎日・東

京日日新聞社

社賓

貴族院議員

帝國學士院會

員 帝國藝術

院會員

熊本縣の人

文久三年(二

五二三)生

乃木大將

乃木希典

陸軍大將

學習院長

伯爵

舊長門國(山

口縣)長府藩

士

大正元年歿

年六十四

### 一三 乃木大將の殉死

徳富蘇峰

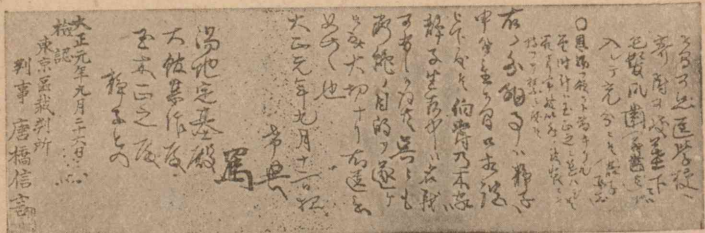
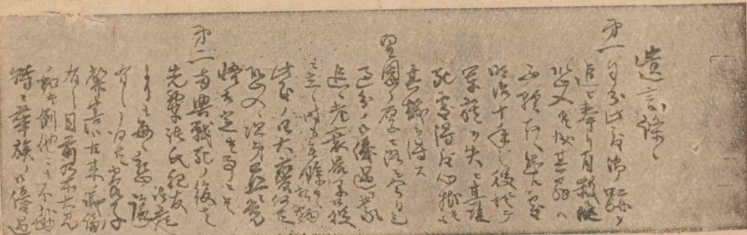
乃木大將の自刃は、深夜の警鐘の如く、青天の霹靂の如く、甚  
 深なる印象を天下に與へたり。苟も心ある者は、何人も自己  
 に與へられたる一大鉗鎚として之を受用するを禁ずる能は  
 ざるべし。然れども、若し大將自刃の目的こゝに存すと云は  
 ば、是、決して大將の本意にあらず。恩賞は功勞に伴ふ。さ  
 れど若し恩賞を邀へんがために身を致して君國に奉ずと云  
 はば、是、忠臣義士の心を以て、單なる商賣根性となすものなり。  
 大將の一死を我に善用し、國に善用し、世道人心に善用するは  
 吾人の責任なり。されど、大將が後人に教訓せんがために、時  
 世を警醒せんがために、汚風惰俗に一大鐵槌を下さんがため

明治十年之役  
西南役

に、特に自刃したりと云ふも  
 のあらば、是、大將の心事を誣  
 ふるも亦甚だしと云はざる  
 べからず。

吾人の所見によれば、大將  
 自刃の理由は其の遺言書の  
 第一條に於て盡くしたり。

曰く、  
 自分此度御跡を追ひ奉  
 り自殺候段恐入候儀其  
 罪は不輕存候然る處明  
 治十年之役に於て軍旗



(尾・首) 書言遺將大木乃



此度の御大變  
明治天皇の崩御

吉田松陰

名は矩方

通稱寅次郎

幕末の先覺者

長門國(山口

縣)萩藩士

安政六年(二

五-九)歿

年三十

士規七則

松陰が獄中で

草した教訓

ストア派

ギリシヤ、ロ

ーマ哲學の一

派でその道徳

説は義務を重

んじ克己・禁

欲を旨とした

三舍を云々

晉楚治兵

遇于中原

其辟君三

舍(左傳)

金州城

關東州金州の

西北に在る

南山役

明治三十七年

五月南山(金

州城西方の

丘)に於て我

が軍がロシア

軍を破つた戦

一兒

長男勝典

陸軍歩兵大尉

明治三十七年

歿 年二十六

旅順

關東州の南端

に在つたロシ

ヤ軍の要塞地

現關東州旅順

市

を失ひ其後死處得度心掛候も其機を得ず

皇恩の厚に浴し今日迄過分の御優遇を蒙追々老衰最早

御役に立候時も無餘日候折柄此度の御大變何共恐入候

次第茲に覺悟相定候事に候

と。大將自刃の行徑や此の如く明白なり。其の心事や此の

如く光明なり。豈紛々聚訴の餘地あらんや。

大將の後半生は殆ど吉田松陰の士規七則の標本たりき。

古羅馬のストア派の英雄も或は三舍を避くるが如き、簡素嚴

峻剛健の生活なりき。

吾人は茲に大將の事歴を説くの煩を要せず。明治三十七

八年役に於て彼は第三軍の將として出征したり。彼の責任

や實に重大なり。彼は二兒と共に家を出て、三棺を竝べざれ

ば葬送する勿れ」と家人に戒めたりといふ。さはれ彼もまた

人の父なり。

山川草木轉荒涼。十里風腥新戰場。

征馬不前人不語。金州城外立斜陽。

是、南山役後の作にして、無心にして之を讀む、なほ黯然たらざ

るを得ず。況や此の時に於て、大將が其の一兒を失ひたる事

實を知る者に於ては、其の胸中を忍びて、自ら泣かざらんと欲

するも能はざるなり。大將は本來多感の質なり。たゞ武士

道の練磨によりて、剛腸の武夫たりしのみ。一首二十八字、字

字、是血涙の結晶にあらずや。

旅順攻圍軍は、古今未曾有の慘烈なる經驗を嘗めたりき。

中隊大隊の全滅は、固より、聯隊の全滅さへも繰返されたり。



他の一兒  
次男保典  
陸軍歩兵中尉  
明治三十七年  
歿年二十四

而して豫期を超ゆること半歳にして漸く開城を見るに至れり。大將は此の役にまた他の一兒を失ひたり。此の如くにして二棺は既に出来たり。他の一棺は如何。

皇師百萬征強虜 野戰攻城屍作山

愧我何顏看父老 凱歌今日幾人還

大將の鋭敏なる良心責任感は大將を驅りて幾回か自決せしめんとせり。されど時未だ到らず餘儀なく其の死處を待てり。

明治三十七八年役以後の大將は殆ど軍服を纏ひたる聖僧なりき。しかも獨善は其の屑しとする所にあらず。大將は結髪以來尊皇愛國の大義を聞き治國平天下の大道を學ぶ。今や滔々たる世潮に對して固より没交渉たる能はず力の限

り之を矯正し躬ら行ふ所を以て之を他に及さんと欲したりしや明らけし。而して大將を學習院長に擢用し給ひたるは明治天皇の明鑑にして眞に適材を適所に措きたるものと云ふべきなり。

學習院長則之

崇皇國之懿風

履聖人之至道

不通國典何以養正

不讀聖經何以修身

明辨之

務行之

明治己酉正月

源朝臣希典敬書

則學院習學筆長院木乃

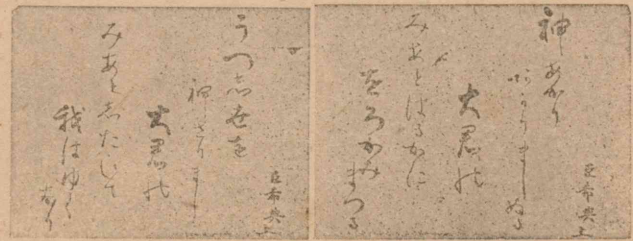
大將は明治天皇の知遇を辱うし、特に三十七八年役以來其の孤獨なる家庭枯淡なる生活に於て示したる自損利他奉公獻身の精誠は、深く天皇の鑑獎嘉諒し給ふ所となり、偶彼を軍職に大用せんとの議を上る

者ありしも、天皇は固く執りて容し給はざりしと云ふ。大將の進路は、曲折あり頓挫ありて、決して和易輕快なりしと云ふ



を得ず。然れども、其の晩節に於て、かくも聖天子の知遇を辱  
 うす、大將が鞠躬盡瘁、老の將  
 に至らんとするを知らざり  
 し心事、また以て察すべきに  
 あらずや。

然るに、計らざるに天皇の  
 御大患に逢ひ、遂に崩御に逢  
 ひ奉りぬ。思ふに大將は代  
 り奉らるべきものならば、畏  
 れながら身を以て代り奉ら  
 んと祈りしならん。大將は  
 最後まで御平癒を信じたりき。而してそは水泡に歸したり。



(下) 世辭將大木乃と (上) 眞寫地高三〇二

うつし世をの歌  
 乃木大將の辭  
 世

大將夫人  
 乃木靜子  
 湯地氏  
 大正元年  
 年五十四

こゝに於て、一死以て天皇に殉じ奉る。餘人にありては知ら  
 ず、大將に於ては極めて自然の事なり、尋常の事なり。求めて  
 やまざりし死處は、こゝに與へられたるなり。

うつし世を神さりましし大君のみあとしたひ  
 て我はゆくなり

たゞ此の如きのみ。蓋し、大將は天皇に殉じ、大將夫人は大將  
 に殉じたり。大將夫妻の死は、宛も天皇の大喪儀に際し、最も  
 莊嚴なる誄歌を合奏したるものなり。かくて豫期せられた  
 る三棺は、豫期せられざる四棺となりぬ。乃木家闔門、國事皇  
 事に斃れたり。明治、大正の過渡に於ける、血を以て描ける千  
 古の一大悲史は、此の如くして成れり。嗚呼、哀しきかな。

(蘇峰文選)



一四 故郷の花

薩摩守忠度  
平忠度  
清盛の弟  
左兵衛佐  
藤原俊成門の  
歌人  
壽永三年（一  
八四四）歿  
年四十一  
五條の三位俊成  
藤原俊成  
皇太后宮大夫  
歌人  
千載集の撰者  
元久元年（一  
八六四）歿  
年九十一

薩摩守忠度はいづくよりか引返されたりけん侍五騎童一人わが身ともに七騎取つて返し五條の三位俊成卿の宿所におはして見給へば門戸を閉ぢて開かず。「忠度と名乗り給へば」落人還り來れり」とて其の内噪ぎあへり。薩摩守急ぎ馬より飛んで下り自ら高らかに申されけるは「別の子細候はず三位殿に申すべき事あつて忠度が歸り參つて候。門を開かれずとも此の際まで立寄せ給へ」と宣へば俊成卿「さる事あるらん。其の人ならば苦しかるまじ。入れ申せ」とて門を開けて對面あり。

薩摩守宣ひけるは、年來申し承つて後は、愚かならぬ御事に

當家  
平家

君  
安徳天皇  
第八十一代

思ひ參らせ候へども此の二三年は、京都の騷國々の亂れ當家の身の上の事に候間疎略を存ぜずといへども常に參り寄る事も候はず。君既に帝都を出てさせ給ひぬ。一門の運命は



忠度俊成を訪ふ

や盡き候ひぬ。撰集の御沙汰あるべき由承りしかば生涯の面目に一首なりとも御恩を蒙らうと存じて候ひしに、やがて世の亂れ出て來て其の沙汰なく候條、たゞ一身の歎と存じ候。世靜まり候ひなば、定めて勅撰の御沙汰候はんずらん。是に候卷物の中にさりぬべきもの候はば、一首なりと



も御恩を蒙つて、草の蔭にても嬉しと存じ候はば、遠き御守とこそ成り参らせ候はんずれ」とて、日來詠み置かれたる歌どもの中に秀歌と覺しきを百餘首書き集められたりける卷物を、今はとて打立たれける時、是を取つて持たれたりしが、鎧の引合はせより取り出でて俊成卿に奉る。

三位これを開けて見給ひて、かゝる忘形見を賜はり置き候上は、ゆめ／＼疎略を存ずまじう候。さても只今の御渡りこそ情も勝れて深う、哀も殊に思ひしられて、感涙抑へ難う候」と宣へば、薩摩守喜んで、今は西海の波の底に沈まば沈め、野山に尸をさらさばさらせ、憂世に思ひ置く事候はず。さらば暇申してとて、馬に打乗り、兜の緒をしめ、西をさしてぞ歩ませ給ふ。三位後を遙かに見送つて立たれたれば、忠度の聲と覺しくて、

「前途程遠し、思を雁山の夕の雲に馳すと高らかに口ずさみ給へば、俊成卿いとゞ名残惜しう覺えて、涙を抑へてぞ入り給ふ。其の後、世静まつて千載集を撰ぜられけるに、忠度のありし有様、いひ置きし言の葉、今更思ひ出でて哀れなりければ、彼巻物の中に、さりぬべき歌幾らもありけれども、勅勘の人なれば、名字をば顯されず、故郷の花といふ題にて詠まれたりける歌一首、讀人しらずと入れられける。

ささ浪や志賀の都はあれにしを昔ながらの山  
 櫻かな  
 其の身朝敵となりにし上は子細に及ばずといひながら、口惜しかりし事もなり。

(平家物語)

前途程遠し云々  
 前途程遠し、馳、思、於雁山之暮、雲、後會期遠、鶯、櫻、於、鶯、之、啼、涙、(和漢朗詠集) 千載集 二十卷 勅撰集の第七 文治三年(一八四七)撰進 撰者藤原俊成 志賀の都 天智・弘文兩 天皇の皇都 現大津市の北部に在つた 平家物語 十二卷(流布本) 鎌倉時代初期に成つた軍記物語 作者未詳



### 一五 小枝の笛

一の谷の軍  
 壽永三年（一  
 八四四）二月  
 孫津國一の谷  
 （現神戸市須  
 磨區の内）に  
 於ける源平兩  
 軍の戦  
 熊谷次郎直實  
 源頼朝の臣  
 後出家  
 武藏國（埼玉  
 縣）の人  
 承元二年（一  
 八六八）歿

さる程に、一の谷の軍破れにければ、熊谷次郎直實、平家の公達助け船に乗らんと、汀の方へや落ち給ふらん、あつばれよからん大將軍に組まばやと思ひ、磯の方へ歩まするところに、練貫に鶴繡うたる直垂に、萌黄匂の鎧著て、鍬形打つたる冑の緒をしめ、金作りの太刀を佩き、二十四さいたる切斑の矢負ひ、滋籐の弓持つて、連錢蘆毛なる馬に黄覆輪の鞍置いて乗つたる武者一騎、沖なる船に目をかけて、海へさつと打入れ、五六段ばかり泳がせたる。

熊谷、あれは大將軍とこそ見參らせて候へ。まさなうも敵に後を見せ給ふものかな。返させ給へ、返させ給へ」と扇をあ

げて招きければ、招かれて取つて返し、汀に打上らんとするところにおし並べて、むずと組んでどうと落ち、取つて抑へて、首



熊谷次郎直實

を搔かんとて冑をおし仰のけて見ければ、年十六七ばかりなるが、薄化粧して鐵漿黒なり。我が子の小次郎が齡ほどにて、容顏誠に美麗なり。「抑、如

何なる人にて渡らせ給ひ候やらん。名乗らせ給へ。助け參らせん」と申せば、汝は誰そと問ひ給ふ。「物其の數にては候はねども、武藏國の住人熊谷次郎直實」と名乗り申す。「さては汝

小次郎  
 熊谷直家



に逢うては名乗るまじいぞ。汝がためには好い敵ぞ。名乗らずとも首を取つて人に問へ。見知らうずるぞ」とぞ宣ひける。

熊谷「あつばれ大將軍や。此の人一人討ち奉りたりとも、負くべき軍に勝つべきやうもなし。又討ち奉らずとも、勝つべき軍に負くることもよもあらじ。小次郎が薄手負うたるをだに直實は心苦しう思ふに、此の殿の父、討たれぬと聞いて、如何ばかりか歎き給はんずらん。あはれ助け奉らばや」と思ひて、後をきと見ければ、土肥、梶原五十騎ばかりにて續いたり。熊谷涙を抑へて申しけるは、「助け参らせんとは存じ候へども、身方の軍兵雲霞の如く候。よも遁れさせ給はじ。人手にかけ参らせんより、同じくは直實が手にかけて参らせて、後の御孝

土肥  
土肥實平  
梶原  
梶原景時  
共に源頼朝の  
臣

養をこそ仕り候はめ」と申しければ、「たゞとうとう首を取れ」とぞ宣ひける。熊谷餘りにいとほしくて、いづくに刀を立つべしとも覺えず、目も昏れ、心も消え果てて、前後不覺に覺えけれども、さてしもあるべき事ならねば、泣くく首をぞ搔いてける。「あはれ、弓矢とる身ほど口惜しかりける者はなし。武藝の家に生まれずば、何とてかゝる憂目をば見るべき。情なうも討ち奉りたるものかな」とかき口説き、袖を顔におし當てて、さめくとぞ泣きみたる。

や、久しうありて、さてもあるべきならねば、鎧直垂を取つて首をつゝまんとしけるに、錦の袋に入れたる笛をぞ腰にさされたる。「あないとほし、此の曉城の内にて管絃し給ひつるは、此の人々にておはしけり。當時身方に東國の勢何萬騎か



九郎御曹司  
源義經  
修理大夫經盛  
平經盛  
清盛の弟  
大夫敦盛  
平敦盛  
經盛の第三子

忠盛  
平忠盛  
清盛の父  
刑部卿  
仁平三年(一  
八一三)歿  
年五十八  
鳥羽院  
鳥羽天皇  
第七十四代

あるらめども、軍の陣に笛持つ人はよもあらじ。上臈はなほも優しかりけり」とて、九郎御曹司の見參に入れたりければ、これを見る人涙を流さずといふことなし。後に聞けば、修理大夫經盛の子息に、大夫敦盛とて、生年十七にぞ成られける。これよりしてこそ、熊谷が發心の心は出できにけれ。

件の笛は、祖父忠盛、笛の上手にて、鳥羽院より賜はられたりけるとぞ聞えし。經盛相傳せられたりしを、敦盛器量たるによつて持たれたりけるとかや。名をば小枝とぞ申しける。

(平家物語)

一六 扇の的

さる程に  
壽永四年(一  
八四五)二月  
源義經は阿波  
から俄に讃岐  
の屋島に平家  
の軍を襲つた

阿波國  
現徳島縣  
讃岐  
讃岐國  
現香川縣  
判官  
源義經

後藤兵衛實基  
義經の部將

さる程に、阿波讃岐に平家を背いて源氏を待ちける兵ども、あそこの嶺、こゝの洞より、十四五騎、二十騎、打連れ、参りければ、判官程なく三百餘騎にぞなりにける。「今日は日暮れぬ、勝負を決すべからず」とて、源平互に引退くところに、沖の方より、尋常に飾つたる小船一艘、汀へ向かつて漕ぎ寄せけり。磯へ七八段ばかりになりしかば、船を横ざまになす。あれは如何にと見る程に、船の中より、年の齡十八九ばかりなる女房の誠に美しきが、柳の五衣に紅の袴著て、皆紅の扇の日出したるを船のせがいに挟み立て、陸へ向かひてぞ招きける。

判官、後藤兵衛實基を召して、「あれは如何に」と宣へば、「射よと



下野國  
現栃木縣

にこそ候らめ。たゞし大將軍の矢面に進んで御覽せば、手だれに狙うて射落せとの謀と覺え候。さも候へ、扇をば射させらるべうや候らんと申す。「射つべき仁は身方に誰かある」と宣へば、「上手どもいくらも候なかに、下野國の住人、那須太郎資高が子に與一宗高こそ、小兵にて候へども、手ききて候へ」と申す。判官、證據はいかにと宣へば、「かけ鳥などを争うて、三つに二つは必ず射落す者にて候」と申しければ、判官「さらば召せ」とて召されたり。

與一、其の比は未だ二十ばかりの男なり。かちんに赤地の錦を以ておほくびはた袖いろへたる直垂に、萌黄緘の鎧著て、足白の太刀を佩き、切斑の矢の、其の日の軍に射て少々残りたりけるを、首高に負ひなし、薄切斑に鷹の羽作ぎ交ぜたるぬた

めの鎧をぞ差し添へたる。滋籐の弓脇に挟み、冑をば脱ぎ高紐に懸け、判官の御前に畏まる。判官、如何に與一、あの扇の眞中射て、平家に見物せさせよかしとぞ宣ひける。與一、畏まつて申しけるは、「射おほせ候はん事不定に候。射損じ候ひなば、ながき身方の御瑕にて候べし。一定仕らんずる仁におほせつけらるべうや候らんと申す。判官大いに怒つて、鎌倉を立つて西國へ赴かん殿原は、義經が命を背くべからず。少しも子細を存ぜん人々は、とう／＼是より歸らるべし」とぞ宣ひける。

與一、重ねて辭せば、悪しかりなんとや思ひけん、はづれんは知り候はず、御説にて候へば、仕つてこそ見候はめ」とて御前を罷り立ち、黒き馬の太く逞しきに、小房の鞆かけ、まるほや摺つ





高宗一與須那

たる鞍置いてぞ乗つたりけるが、弓取り直し、手綱かいくり、汀へ向いて歩ませければ、身方の兵ども、與一が後を遙かに見送つて、「此の若者、一定仕り候ひぬと覚え候」と申しければ、判官もたのもしげにぞ見給ひける。矢比少し遠かりければ、海へ一段ばかり打入れたれども、なほ扇のあはひ七段ばかりはあるらんとこそ見えたりけれ。

比は二月十八日の酉の刻ばかりのことなるに、折節北風烈しくて、磯うつ浪も高かりけり。船は揺りあげ揺りすゑ漂へば、扇も串に定まらずひらめいたり。沖には、平家船を一面に並べて見物す。陸には、源氏くつばみを並べてこれを見る。何れもく、晴ならずといふことぞなき。

與一目を塞ぎて、南無八幡大菩薩、別しては我が國の神明、日光權現宇都宮那須湯泉大明神、願はくはあの扇の真中射させてたばせ給へ。これを射損ずるものならば、弓切り折り自害して、人に再び面を向くべからず。今一度本國に歸さんと思し召さば、此の矢はづさせ給ふなと心の中に祈念して、目を見開いたれば、風も少し吹き弱りて、扇も射よげにぞなつたりける。

我が國  
下野國  
日光權現  
現栃木縣上都  
賀郡日光町に  
在る國幣中社  
二荒山神社  
宇都宮  
宇都宮大明神  
現宇都宮市に  
在る國幣中社  
二荒山神社  
那須湯泉大明神  
現栃木縣那須  
郡那須村に在  
る溫泉神社



與一鏑を取つて番ひよつ引いてひようと放つ。小兵といふ條十二束三つぶせ、弓は強し、鏑は浦響く程長鳴りして、あやまたず、扇の要際一寸ばかり置いて、ひふつとぞ射切つたる。鏑は海に入りければ、扇は空へぞ揚りける。暫しは虚空に閃きけるが、春風に一揉み二揉みもまれて、海へさつとぞ散つたりける。夕日のかゞやいたるに、皆紅の扇の日出したるが白波の上に漂ひ、浮きぬ沈みぬゆられければ、沖には平家舷を敲いて感じたり、陸には源氏箆を敲いてどよめきけり。

(平家物語)

北原白秋

名は隆吉  
詩人 歌人  
帝國藝術院會  
員

福岡縣の人  
明治十八年生  
柳河

現福岡縣山門  
郡柳河・城内  
兩町及び沖端  
村一帯の地

肥後  
現熊本縣  
久留米  
福岡縣久留米  
市

佐賀  
筑後川  
熊本・大分兩  
縣界に發源し

福岡・佐賀兩  
縣界を流れて  
有明海に注ぐ

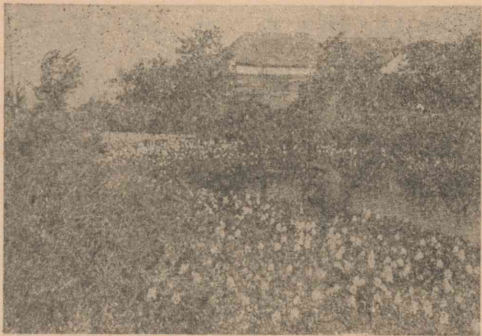
### 一七 水郷

北原白秋

私の郷里柳河は水郷である。さうして靜かな廢市の一つである。自然の風物は如何にも南國的であるが、既に柳河の街を貫通する數知れぬ溝渠（溝、わ）の水には、日にくゞ廢れ行く舊い封建時代の白壁が、今猶なつかしい影を映す。肥後路から、或は久留米路から、或は佐賀から筑後川の流れを越えて、わが町に入り來る旅人は、其の周圍の大平野に分岐して、遠く近く燻し銀の光を放つてゐる幾多の人工的河水を目にするであらう。さうして歩むにつれて、其の水面の隨處に、菱の葉蓮、眞菰、河骨、或は赤褐黄緑其の他さまざまの浮藻の強烈な更紗模様の中に、かすかに淡紫のウォーターヒヤシンスの花を見出す



であらう。



スンジャヒーターオー

水は清らかに流れて廢市に入り、廢れ果てた旅籠屋の、人も無き廚の下を流れ、洗濯女の白い晒布に注ぎ、水門に堰かれては酒造る水となり、汲水場に立つ湯上りの人の脣を嗽ぎ、氣の弱い鶯の毛に擾され、さうして夜は觀音講の懐かしい提燈の燈をちらつかせながら、堰を隔てて海近き沖の端の鹹川に落ちて行く。靜かな幾多の溝渠は、かうして昔のまゝの白壁に寂しく光り、たま〜芝居見の水路となり、蛇を奔らせ、變化多き少年の祕密を育む。水郷柳河は、さながら水に浮いた

沖の端  
山門郡沖端村  
作者の生地  
鹹川  
沖端川  
矢部川の分流

灰色の柩である。

折々の季節につれて、四邊の風物も改る。短い冬の間に見る影もなく汚れ果てた田や畑に、刈株のみが鋤き返されたまゝ、色もなく乾き盡くし、羽に白い斑紋を持つた怪しげな高麗鳥のみが廢れた寺院の屋根に鳴き叫ぶ。さうして、青い股引をつけた櫛の實採りの男が、靜かに暮れて行く卵色の梢を眺めては、無言に手を動かしてゐる外には、展望の廣い平野だけに何等の見るべき變化も無く、すべてが陰鬱な光に被はれる。柳河の町の子供は、かういふ時、幽か



汲水場



な、しゆぶたの腹の閃にも、話に聞く生膽取の青い眼つきを思ひ出し、海邊の黒猫は、ほゞけ果てた白い穂の限りもなく戦いでゐる枯葦原の中に、じつと蹲つたまゝ、過ぎ行く冬の瞬に、晝も猶耳傾けて死ぬるであらう。

いづれにも増して春の季節の長いといふことは、また此の地方を限りもなく悲しいものに思はせる。麥が伸び、見渡す限りの平野に黄色い菜の花の毛氈が柔らかな軟風に薫り始める頃、まだ見ぬ幸を求めるために、うら若い町の娘の一群は、笈摺に身を窶し、哀れな巡禮の姿となつて、始めて西國三十三番の札所を旅して歩く。其の留守の間にも、水車は長閑に廻り、町外れの飾屋の爺は、大きな籠甲縁の眼鏡をかけて、怪しい金象眼の愁にちんかちと槌を鳴らし、寂しげな薄葉鐵職人は、

じり／＼と赤い封蠟を溶かし、黄色い支那服の商人は、生温い挨拶の言葉をかけて戸毎に覗き始める。春も半ばとなつて菜の花も散りかゝる頃には、街道の處々に木蠟をならして干す畑が蒼白く光り、野の隅には粗末な蓆張りの圓天井が作られる。其の芝居小屋の陰を行く馬車の喇叭のなつかしさよ。さはいへ、大麥の花が咲き、からしの花も實となる晩春の名残惜しさは、青くさい芥子の萼や、新しい蠶豆の香に、いつしかとまたまぎれ行く。

まだ夏には早い五月の水路に、杉の葉の飾を取付け始めた大きな三神丸の一部を、ふと學校歸りに發見した沖の端の子供の喜は何に譬へよう。艦の方の化粧部屋は蓆で張られ、昔ながらの廢れかけた舟舞臺には、櫻の造花を隈無くかざし、欄

三神丸  
沖端村の水天  
宮の祭禮船



千の三方に垂らした御簾は、彩色も褪せ果てた物ではあるが、水天宮の祭日となれば、粹な紺の法被の若い衆に棹さされて、幕間には笛や太鼓や三味線の囃子面白く、町を替へる度に幕を替へ、日を替へる度に歌舞伎の外題も取替へて、同じ水路を下すること三日三夜、見物も皆あちらこちら、の溝渠から小舟に棹さして集り、華やかに水郷の歡を盡くして別れるもの、何處かに頹廢の趣が見えて、祭の濟んだあとから夏のはらは日に日に深くなる。



(北原白秋畫) 舟舞臺

此の騒が静まれば、柳河には又ゆかしい螢の時季が来る。

あの眼の光るは

星か、螢か、鶉の鳥か、

螢ならばお手に取る、

お星様なら拜ませう……

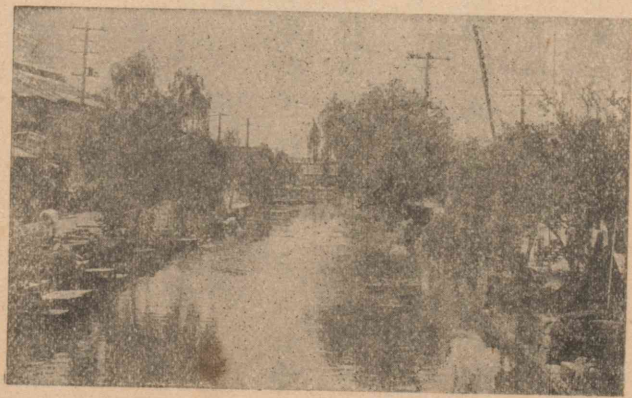
穉い時、私はよくかういふ子守唄を聞かされた。さうして恐しい夜の闇におびえながら、乳母の背中から手を出して、あの首の赤い螢を握りしめた時、私はどんなに好奇の心に顫へたであらう。實際、螢は此の地方の名物である。馬鈴薯の花咲く頃、街の小舟はまた幾つとなく矢部川の流れを溯り始める。さうして、甘酸っぱい燐光の息する度に、青々と眼にしみる螢籠に美しい假寐の夢を時たまに閃かしながら、水のまに〜

矢部川  
福岡縣八女郡  
に發源し筑紫  
平野の南部を  
流れて有明海  
に注ぐ



夜をこめて流れ下るのを習慣とするのである。

長い霖雨の間に、果實の樹は重くしなだれ、ものの卵はねばくと瀧水たきみづのむじな藻にからみつき、蛇は木にのぼり、眞菰は繁りに繁る。柳河の夏はかうして總べての心を重く暗く腐らしたあと、池のほとりに鬼百合の赤い閃を先立てて、焼くが如き暑熱を注ぎかける。日光の直射を恐れて羽蟻は飛びめぐり、溝渠は水涸れて悪臭を放ち、病犬は朝鮮薊の紫の刺に後退りつゝ、吠え廻り、蛙は



沖の端

蒼白い腹を仰向けて死に、泥臭い鮎の頭は苦しさうに泡を立て始める。

七八月の炎熱はかうして平原の到る處の街々に激しい流行病を仲介し、日毎に夕焼の赤い反照を浴びせかけるのである。此の時、海にもつとも近い沖の端の漁師原には、男も女も半裸體のまま、紅い西瓜を貪り、石炭酸の強い異臭の中に晝は寝ね、夜は病魔退散の呪として、廢れた街の中、或は堀の柳の蔭に縁臺べんたいを持ち出しては盛に花火をあげる。さうして朽ちかかつた家々のランプのかけから、死に瀕した虎列刺患者は恐しさうに蒲團を匍ひだし、たゞじつと薄あかりの中に色變へてゆく五色花火のしたゝりに疲れた瞳を集める。焼酎の不攝生に、人々の胃を害ふも此の時である。犬殺が



歩き、巫女が酒倉に見えるのも此の時である。さうして、雨乞の思ひ／＼に白粉をつけ、紅い隈取を凝らした、假裝行列の、日に日に幾隊となく續いて行くのも此の時である。さはいへ、又、久留米耕をつけ、新しい手籠を抱へた、菱の實賣の、なつかしい「菱しやんをう」の呼聲を聞くのも此の時である。

九月に入つて登記所の庭に黄色い雞頭の花が咲くやうになつても、まだ虎列刺は止む氣色もない。若い町の辯護士が忙しさに粗末な硝子戸を出入りし、蒼白い藥種屋の娘のあはれな噂が漸く人の口に上るやうになれば、秋はもう青い澁柿を搗く酒屋の杵の音にも、新しい匂の爽やかさをしのばせる。

祇園會が終り、秋も更けて、線香を乾かす家、菜種油を搾る店、

パラフィン蠟燭を造る娘、提燈の繪を描く義太夫の師匠、すべてがしんみりとした氣分に物のあはれを思ひ知る十月の末には、先づ秋祭の準備として、柳河のあらゆる溝渠は、あらゆる市民の手によつて、水は干され、魚は掬はれ、腥い水草は取除かれ、溝泥は浚ひ盡くされる。此の「水落ち」の楽しさは町の子供の何にも代へ難い季節の華である。さうして此の一騒ぎのあとから、又久しぶりに清らかな水が廢市に注ぎ入り、楽しい祭の前觸が、異様な道化の服裝をして喇叭を鳴らし、拍子木を打ちつゝ、明日の芝居の外題を面白をかしく披露しながら、町から町へと巡り歩く。

祭は町から町へ、日を異にして準備される。さうして彼我の家庭を擧げて往來しては、一夕の愉快な團欒に、美しい懇親



の情を交すのである。それに、識る人も識らぬ人も、酔うては無禮講の風俗をかしく、朱欒の實の蔭に、幼兒と獨樂を廻し、戸毎に酒を尋ねては浮かれ歩く。

祭の後の寂しさは又格別である。野は火のやうな檣紅葉に、百舌鳥がたゞ鳴きしきるばかり。何處からともなく、漂浪さまようて來た傀儡師の肩の上に、生白い人形の首が、かつくくと眉を振る物凄さも、何時の間にか人々の記憶から搔消されるやうに消え失せて、寂しいく冬が來る。

(思ひ出)

一八 兄弟

山本有三

山本有三  
名は勇造  
劇作家 小説家  
帝國藝術院會  
員  
栃木縣の人  
明治二十年生

— 兄さん、これさうだらう。

— どれ。

兄はそばにゐる弟の方をふり向いた。そして弟の差出したきのこを見た。しかしすぐいつた。

— それは違ふよ。かういふんでなくつちや。

彼は自分で今採つたばかりの初茸を弟に示した。

— これ駄目！

弟は残り惜しさうに採つたきのこをながめてゐた。

— あ、蓋の下にぎざ／＼のないのは駄目だよ。蛇茸つてね、毒のきのこなんだよ。



彼はまだ十一の少年だけれど、弟に對するときは流石に兄らしい落ちつきといたはりがあった。

弟が少ししよげてゐるのを見ると、彼は氣の毒になつた。それでポールバンのやうな色をした初茸の頭を見つけると、すぐに弟に教へてやつた。

——眞ちゃん、そこにあるよ。

弟はそれを聞くと、元氣づいてそこらを見廻した。しかし白茶けた落葉の外には何にも眼にはいるものはなかつた。兄は重ねていつた。

——そら、そこにさ。眞ちゃんの足もとのところに。

——どこに。

——これさ。

と、兄は弟のそばに寄つて來て指さした。

——葉つばで分からないんだもの。これ？

弟は落葉を拂ひのけていつた。

——あ。

——毒茸ぢやない？

——うゝん、これが本當の初茸だよ。

——僕、採つてもいゝ？

——いゝとも。

弟はかゞんで初茸を抜いた。しかし無氣味な蟲でもつかんだ時のやうに、あわててきのこを離してしまつた。

——何だつて捨てつちまふの、眞ちゃん。

兄の聲には詰問の色があつた。



——だつて恐いんだもの。

——何がさ？

弟はうつむいたまゝ黙つてゐた。

すると兄の唇に微笑が浮かんで來た。

——あゝ、きのこの色が變つたんでおどろいたんだね。なに、そりや何でもないんだよ。初茸はさはるとすぐ色が變るんだよ。

——ぢや大丈夫？

——大丈夫さ。

弟はやつと安心したといふ風であつた。

——もつたいない。こん中へ入れときよ。

兄は笊の代りに、地上に裏返しにしておいてある自分の帽子

を指さした。弟は拾つてその中に入れた。それからついでに、兄が採つた帽子の中のきのこの數をかぞへて見た。

その間に、兄は落葉をかさつかせながら、あつちこつち初茸をあさつてゐた。兄が眼をきよろつかせてゐる様子は、丁度朝おばあさんが背中を丸くして、蒲團の上で蚤を追ひかけてゐる恰好とよく似てゐた。弟はそれを見ると、わけもなく嬉しい氣持になつて來た。そして、自分もまたすぐに背中と眼玉をまあるくして、茸狩をやり出した。もちろん弟は兄の四半分も採れなかつたけれど、松林の中を跳ね廻つて歩くことは、何といつても彼には愉快でたまらなかつた。

突然、どしいんといふひびきがした。兄はふいと眼を上げると、一間ばかり先の、少し傾斜になつてゐる地面の上を、弟は



ころくくくところがつてゐた。恐らく木の根か何かにつまづいて倒れたのが、はずみを食つてころがり出したものらしい。それを見ると、兄は思はずふき出してしまった。弟が眼の前で倒れたのだから、すぐにも驅けて行つて起してやるのが當然なのだ。その瞬間には、「弟」とか「起す」とかいふ考はまるでなかつた。それどころか、手を打つてはやし立てたいやうな氣持でいつばいだつた。しかし次の瞬間にはもう弟のそばにゐた。そして木の根方でとまつた弟のからだを引き起した。

その時の彼はいたはり深い兄であつた。彼は心配にふるへながら弟を介抱した。ところが、弟は起き上ると、兄の顔を見るなりにやりと笑つた。すると兄の顔もまたひとりてに

ほゝ笑んでしまつた。泣き出すと思つた弟が笑つたものだから、兄は急に氣が軽くなつた。

弟は起き上るとすぐに笑へたくらみだから、何處も怪我はしてゐなかつた。しかし彼の笑は實に妙ちくりんな笑だつた。勿論しくじりを演じた後のてれ隠し笑に相違ないのだが、それにしてもどこか變なところがあつた。よく見ると、それは弟の右の頬つべたにしたゝか泥がついてゐたからだつた。恐らく倒れた時にくつついたものだらう。兄はそれを知ると、すぐに指で泥を落してやつた。けれどもよく落ちないので、筒袖の中に手を引込めて、それで頬つべたをこすつてやつた。ところが、それでもすつかり綺麗にならないものだから、今度は彼は筒袖の先に唾をくつつけて、丁寧に拭いてや



つた。その間、弟はおとなしくして、兄のやつてくれるまゝになつてゐた。

それから二人はまた茸狩をやり出した。

しばらくしてから、兄は初茸で一杯になつてゐる帽子を取り上げて得意さうにいつた。

——真ちゃん、こんなに採つたよ。

その時突然うしろで大きな聲がした。

——やい、それを持つてくことはならねえぞ。

二人はびつくりして、その聲の方を見た。そこには山番の爺さんが立つてゐた。彼は待ち構へてゐたといはぬばかりに、ふり向いた少年の手からきのこのはいつてゐる帽子をふんどくつた。そしていきなり、兄の横つ面を一つなぐりつけた。

た。

——太い野郎だ。

しかし、年上の少年は泣かなかつた。たゞ顔を眞赤にして首をうな垂れただけだつた。ところが弟の方は、自分がなぐられたのではないけれど、急にわあつと泣き出してしまつた。山番は、少年等が無断で初茸山を荒したことをなほくどくど怒つた。

そして、

——また這入つて來ると承知しねえぞ。

さういつて二人を松林の外に追ひ立てた。そこまで來ると爺さんは帽子の中の初茸を自分の策の中にあけて、空になつた入れ物を少年に叩きつけたなり行つてしまつた。



弟はなほしく／＼泣いてゐたが、こゝんで芝の上に落ちてゐる兄の帽子を拾つた。そして、それを兄に手渡さうとした。すると、兄は帽子を受取らずに、いきなり弟の横つ面をなぐりつけた。爺さんになぐられたので、その餘憤が弟に飛んで行つたのではない。かうした場合、年下の者なんぞから親切にされると、何か知らないが兄には一層堪らなかつたのである。弟は不意になぐられたので、前よりも烈しく泣き出した。と、その聲につれて、今まで泣かずにゐた兄も、弟をなぐつておきながらまたわあつと泣き出してしまつた。

それから二人は長いこと泣いてゐた。はじめは聲を立てて泣いてゐたけれど、しまひにはたゞ機械的に涙が出るだけだつた。そして、あつたかい水玉がひつきりなしに流れてゐ

るうちに、二人の頬の上に觸覺のある愉快を覺えて來た。

その時、弟は小さい聲でいつた。

—— 兄さん、勘辨してね。

—— うん。

兄はたゞ一語、涙聲でうなづいた。

やがて兄は、泥だらけになつてゐる帽子を拾つて、膝の上で五六度叩いた。彼はそれを被らないで片手に持つたまゝ、別の手で弟の手をとつた。そしてうちの方へ歩き出した。しかし二人は途々おもひ出したやうになほ泣きじやくつてゐた。

(瘤)



夏目漱石

名は金之助  
英文學者 小

説家

東京市の人

大正五年歿

年五十

仁王

佛法守護の爲

に寺門の兩側

に安置する一

對の金剛力士

運慶

鎌倉時代初期

の佛師

法印

護國寺

新義真言宗豊

山派の別格本

山

東京市小石川

區大塚坂下町

に在る

### 一九 仁王

夏目漱石

運慶が護國寺の山門で仁王を刻んでゐるといふ評判だから、散歩ながら行つて見ると、自分より先にもう大勢集つて、しきりに下馬評をやつてゐた。

山門の前五六間の處には大きな赤松があつて、其の幹が斜に山門の薨を隠して遠い青空まで伸びてゐる。松の緑と朱塗の門とが互に映りあつて見事に見える。其の上、松の位置が好い。門の左の端を、目障りにならないやうに斜ヒラに切つて行つて、上になる程幅を廣く屋根までつき出してゐるのが、何となく古風である。鎌倉時代とも思はれる。

ところが見てゐるものは、みんな自分と同じく明治の人間

である。其の中でも車夫が一番多い。辻待をして退屈だから立つてゐるに相違ない。

「大きなもんだなあ」といつてゐる。

さうかと思ふと、「へえ、仁王だね。今でも仁王を彫るのかね。へえ、さうかね。わつしあ、又仁王はみんな古いのばかりかと思つてた」といつた男がある。

「どうも強さうですね。なんだつてえまず。昔から誰が強いつて、仁王程強い人あ無いつていひまず。何でも日本武尊よりも強いんだつてえからね」と話しかけた男もある。此の男は、尻を端折つて、帽子を被らずにゐた。

運慶は、見物人の評判には委細頓著なく鑿と槌を動かしてゐる。一向振向きもしない。高い所に乗つて、仁王の顔の邊

日本武尊  
倭建命  
御名は小碓命  
景行天皇の皇子  
景行天皇四十三年(七七三)  
薨 御年三十



をしきりに彫り抜いて行く。

運慶は頭に小さい烏帽子のやうなものを載せて、素袍だか何だか分からない大きな袖を背中て括つてゐる。其の様子が如何にも古くさい。わい／＼云つてゐる見物人とはまるで釣合が取れないやうである。自分はどうして今時分まで運慶が生きてゐるのかなと思つた。どうも不思議な事があるものだと考へながら、やはり立つて見てゐた。

しかし運慶の方では、不思議とも奇態とも頓と感じ得ない様子で、一所懸命に彫つてゐる。仰向いて此の態度を眺めてゐた一人の若い男が、自分の方を振向いて、

「さすがは運慶だな。眼中に我々なしだ。天下の英雄はただ仁王と我とあるのみといふ態度だ。天晴だ」といつて賞め

出した。

自分は此の言葉を面白いと思つた。それでちよつと若い男の方を見ると、若い男は、すかさず、

「あの鑿と槌の使ひ方を見給へ。大自在の妙境に達してゐる」といつた。

運慶は今太い眉を一寸の高さに横へ彫り抜いて、鑿の齒を豎に返すや否や、斜に上から槌を打ち下した。堅い木を一刻みに削つて、厚い木屑が槌の聲に應じて飛んだと思つたら、小鼻のおつ開いた怒り鼻の側面が忽ち浮き上つて來た。その刀の入れ方が如何にも無遠慮であつた。さうして、少しも疑念を挾んでゐないやうに見えた。

「よくあゝ無造作に鑿を使つて、思ふやうに眉や鼻が出来る



ものだなと、自分はいんまり感心したから、獨言のやうにいつた。するとさつきの若い男が、

「なに、あれは眉や鼻を鑿て作るんぢやない。あの通りの眉や鼻が木の中に埋つてゐるのを、鑿と槌の力で掘り出すまでだ。まるで土の中から石を掘り出すやうなものだから、決して間違ふ筈はない」といつた。

自分は此の時始めて、彫刻とはそんなものかと思ひ出した。果してさうなら、誰にでも出来る事だと思ひ出した。それで急に自分も仁王が彫つて見たくなつたから、見物をやめて早速家へ歸つた。

道具箱から鑿と金槌を持ち出して裏へ出て見ると、先達の暴風で倒れた檜を、薪にする積りで木挽に挽かせた手頃な奴

が、澤山積んであつた。

自分は一番大きいのを選んで、勢よく彫り始めて見たが、不幸にして、仁王は見當らなかつた。其の次のにも運悪く掘り當てる事が出来なかつた。三番目のにも仁王は居なかつた。自分は積んである薪を片つ端から彫つて見たが、どれもこれも仁王を藏かくしてゐるのはなかつた。遂に明治の木には到底仁王は埋つてゐないものと悟つた。それで、運慶が今日まで生きてゐる理由も略解つた。

(漱石全集)



吉江喬松

號は孤雁

佛文學者

文學博士

早稻田大學教

授

長野縣の人

昭和十五年歿

年六十一

二〇 翼

吉江 喬松

私は小高い丘の上に立つてゐた。

澄みきつた秋の夜の空は紫紺の色をたゞへて、無数の星が  
びか／＼光つてゐる。大空の半圓は遠く野の果を限つて、仄  
暗い野の面には低く風が流れて行くのか、藪の枯草がかさか  
さ鳴つてゐる。大空は胸をあらはして、冷たい夜氣に慄へて  
ゐる。

私は丘の上の草の中に腰をおろして、じつとしてゐた。す  
うつ、すうつと草の葉が擦れあつて、下の野の方からは蟲の聲  
が聞えて来る。

月の昇る前の東の空には淡青い光が漂つて、榎の葉の落ち

た枝が細い幾本もの指を伸ばして、その光を掴むやうにして  
ゐた。

何處か頭の上で、さあつ、さあつと空氣を切つて飛ぶ物音が  
する。はつと思つて、私は頸をすくめて見上げた。はつきり  
見極められないが、薄黒い鳥の影が列をなして行くのが目に  
はひつた。さあつ、さあつと翼の音が斷續する。

空氣が搖れて、顔へ、頸へ、冷たく當る。と思つてゐると、心が  
妙に跳るやうで、胸の動悸が高く打ち出した。體軀ぢゆう波  
立つて血がめぐる。どつき、どつき鼓動する心臓の響と、さあ  
つ、さあつと空氣を切る翼の音とは調子を合はせて鳴つてゐ  
る。

翼の音が、少し遠くなり、微かになつて、その物音の中心が空



を滑つて先へへと移つて行くと、冷たい空気は幾重にも幾重にも輪を描いて波動を起し、その波動は次第に大きくなつて、丘の上に野の草の葉末に及んで行くと、蟲の聲はその波動につれて調子をとり、草の葉は同じく波立つて揺れる。黒い空氣の波の震動、私の心臓もその中につままれて、ゆるく鼓動を立ててゐる。

ぼうつと野は明るくなつた。森の影が長く黒く、黄枯れた草の上に敷かれて、蟲はいま目を醒したかのやうに争つて聲を立てた。

私は月の方へ向かつて、胸へ深く光を吸ひこんだ。月の光の下に、瓦の屋根の竝んでゐる都會が見えだして來た。いつもは騒がしい響の聞えてゐる都會が、今夜に限つて何の物音も立てない。たゞ焼け跡かなにかのやうに黒く見えてゐるばかりである。

淡青い光を空にひろげて、次第に月は昇つて來た。丘の下の野も一層廣く明るくなつて、藪影がぼつり／＼立つてゐるのも見える。ふるへるやうな水溜りも見える。光の波が今は空にも地上にも漲り溢れてゐる。その波が私の體軀の細い血管の中までもくゞり入つて、體軀全體がすつきり透きとほりでもするやうな氣がする。

私は暫くじつとして立つてゐた。

さあつ、さあつといふ音が空に聞えてゐる。私ははつと思ふと、また動悸が強く打ち出した。何物かの襲來を受けたかのやうに、思はず仰向いて見たが何の姿も見えない。が、その



音は前よりも一層近く聞えて來た。そして低く、私の體軀よりも低く、丘の中腹を掠めて行くやうだ。

私はその響の來る方へ鋭く視線を向けた。雁の群れだ。十羽ばかりの雁が横に竝んで、ゆるく羽搏きしながら翔つて行く。右の端にある一羽の鳥が他のものよりも少し先へ出て、時々頸を左右に動かし、頭を高くあげて勢よく飛んで行く。群鳥の背を滑つて視線が少し先の草原へ落ちると、そこには飛び行く鳥の影が草原の上を斜に流れて行くのが見える。野の果の低い空には、大きな星が澄んだ光できら／＼してゐるのも見える。

大きな鳥の一群、荒い羽搏き、動く長い頸、その一團の生命の波動を身近に感ずると、私は怖しさと不思議さに思はず聲を立てようとした。我が生が、形の異なつた、羽を持ち翼を持つた我が生が、いま目の前を翔つて行く。周囲が暗くなつた。たゞ暗い音の波動だけが空にも地にも充ちてゐるやうな氣がする。

暫くたつた。見ると、雁の群は稍遠く隔たつて、羽搏いてゐるとも思はれない。たゞ薄黒いものがずん／＼空を流れて行く。光の波を搔亂し、音と光とが空に亂れて不思議な波動を起し、睡つてゐる地上の草木や人家の屋根に奇妙なりズムを響かせて行く。

鳥の過ぎた後の野原はまたひつそりとして、月の光が枯草の根元まで、根元の土の小さな團塊かたまりにまで射しこんで、大地の胸は冷たいその光を飽くまでも吸つてゐる。

(自然讀本)



島崎藤村

名は春樹

詩人 小説家

帝國藝術院會

員

長野縣の人

明治五年生

隅田川

荒川の下流

東京市を流れ

東京灣に注ぐ

ソイヌ

フランス東部

を流れる河

ヴェイニヌ

同國西部を流

れる河

ガロンヌ

同國南部を流

れる河

セイヌ

同國北部を流

れパリ市中を

貫ぬく河

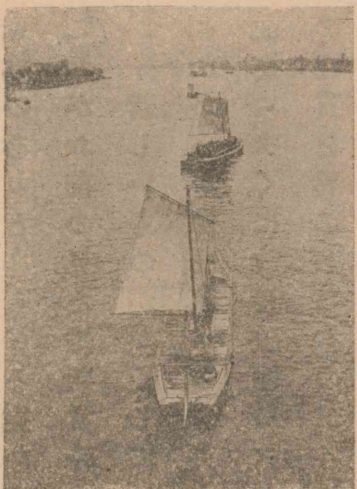
### 二 隅田川の水

島崎藤村

流れよ、流れよ、隅田川の水よ。少年の時分からのお前の昔  
 馴染がまたお前の懐へ歸つて來た。旅にある日、ソイヌ・ヴィ  
 エンヌ・ガロンヌなどの河畔に立つて私が思ひ出すのは、何時  
 もお前のことだつた。巴里のアウステルリツの橋の畔か  
 らセイヌの水を眺めた時にも、私の遠く送る旅情はお前の方  
 であつた。私はお前の岸に歸つて來て、ふたゝびお前の水を  
 見ることを喜ぶ。

私が旅に出た時分から見ると、お前は一層黙つてしまつた  
 やうな氣もする。お前の聲はどうしたらう。何時までお前  
 はそんなに沈黙を續けてゐるのだらう。お前の河岸の變遷

武藏野  
 東京府・埼玉  
 縣附近一帯の  
 平野  
 舊兩國  
 舊兩國橋附近  
 一帯の地



向島附近

と工業化とに壓せられて、お前の白魚が死に、お前の都鳥が飛  
 び去つたやうに、お前の聲もかれ果てたのだらうか。遙かに  
 川上の方から渦巻き流れて來るお前の水があるかぎり、お前  
 の詩がかれ果てようとはど  
 うしても思はれない。私は  
 お前から溢れて來る詩を知  
 りたい。お前の沈黙を破つ  
 た聲を聞きたい。

變遷を眺めて來た。兩岸が武藏野であつた昔からのお前だ。  
 そこに建てられた大きな都の發達を知り悉して來たお前だ。  
 舊兩國が一切の交通の中心で、用をたすにも、物を運ぶにも、舟



の便利によらなければならなかつた時代からのお前だ。お前は驚くべき大改革をまのあたりに見て來た。江戸の崩壊を政治の改變を、憲法の制定を。廣く知識を世界に求めよう、世界のありとあらゆる處から採り得る限りのものを採らう。これがお前の見た維新當時に於ける盛な精神ではなかつたか。新しいものが、かくしてお前の岸へ押寄せて來た。亞米利加からも、佛蘭西からも、英吉利からも、獨逸からも。そして改良に次ぐに改良、破壊に次ぐに破壊を以てした結果、それらの性質を異にしたものが各自思ひ／＼の様式と主張と確執とをもつて、雜然紛然たること恰も植民地の町を見るごとくに、お前の兩側に移植された。時代の象徴とも見るべき建築を見渡すと、お前の岸にあつたものが餘りに溫和しく、餘りに

弱々しく、餘りに纖細で、新しく西洋から入つて來た組織的なものの爲に何となく蹂躪されてしまひさうな氣がして、いたましくてならない。

今になつてこの不調和を歎くのは遅いかも知れない。しかし、我々日本人が餘りにクラシックを捨て過ぎたと氣づく事は決して遅いとは言へない。我々は廣く知識を世界に求める程の銳意と同情とに富んでゐる。唯我々はそれを受け容れるに當つて、強い判斷力を缺いた。言葉を換へて言へば、歴史的の意志を缺いた。それが我々の缺點だ。我々は自己の支配者では無くなつてしまつてゐた。唯新しいものが入つて來るに任かせてゐた。お前の岸にある不思議な不統一、私はそれをお前に問ひたい。お前がまのあたり見た驚くべ



き變改は、人の心に「推移」をば齎したらう、しかしながら、人の奥に「改革」を齎したらうかと。それを思ふと、私は言ひ難い幻滅の悲哀に打たれる。

お前はセイヌでもなく、テームスでもなく、やはり一番親しみの深い隅田川だ。往昔、多感多情な詩人が、嘴の紅い都鳥を見て、家人の生死を尋ねた歌をお前に残した。それほど古い歴史のあるお前だが、私は若いお前を夢みつゝ、それを頼りにして遠い旅から歸つて來た。何となくお前の水はまだ薄暗い。太陽の光線はまだお前の岸に照り渡つてゐないやうな氣がする。お前の日の出が見たい。

(海へ)

テームス  
イングランド  
の東南部を流  
れロンドン市  
中を貫ぬく河  
都鳥を見て云々  
名にしおはば  
いざこと問は  
む都鳥わが思  
ふ人はありや  
なしやと  
(伊勢物語)

本居宣長  
國學者  
伊勢國(三重  
縣)の人  
享和元年(二  
四六一)歿  
年七十二

三二 うひ山ふみ

本居 宣長

世に物學びのすぢ、しなくありて、ひとやうならず。又その學びやうも、教ふる師の心々、學ぶ人の心々にて、さまざまあり。

かくて學問に志して入りそむる人、はじめよりみづから思ひよれるすぢありて、その學びやうも、みづから計らふもあるを、又さやうにとり分きてそれと思ひよれるすぢもなく、學びやうも、みづから思ひとれる方なきは、物しり人につきて、いづれのすぢに入りてかよからん、又うひ學びの輩の學びやうは、いづれの書よりまづ見るべきぞなど問ひ求むる、これつねの事なるが、まことにしかあるべきことにて、その學びのしなを

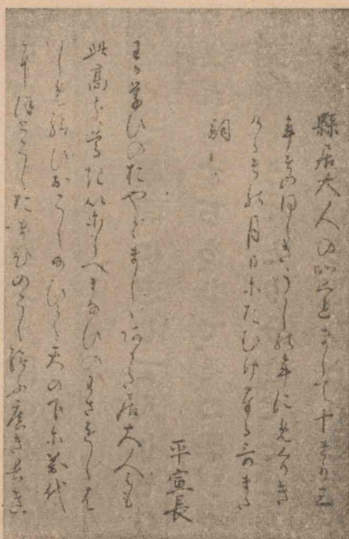


正し、學びやうをも正して、ゆくさきよこさまなるあしき方に落ちざるやう、又その業のはやく成るべきやう、すべて功多かるべきやうを、はじめよりよく認めて入らまほしきわざなり。

同じく精力を用ひながら、そのすぢその學びやうによりて、得失あるべきことなり。

しかはあれども、まづかの學びのしなへは、

他より強ひて、それをとはいひがたし。大抵みづから思ひよれる方にまかすべきなり。いかに初心なればとて、學問にも志すほどのものは、むげに小兒の心のやうにはあらねば、ほど



本居宣長筆蹟

ほどにみづから思ひよれるすぢは、必ずあるものなり。又面  
面好む方と好まぬ方ともあり、又生まれつきで得たる事と、得  
ぬ事ともあるものなるを、好まぬ事得ぬ事をしては、同じやう  
につとめても、功を得ることすくなし。又いづれのしなにも  
せよ、學びやうの次第もひとわたりの理によりて、しかくし  
てよろしとさして教へんはやすきことなれども、そのさして  
教へたる如くにして果してよきものならんや、又思ひの外に  
さてはあしきものならんや、實には知りがたきことなれば、こ  
れも強ひては定めがたきわざにて、實はたゞその人の心まか  
せにしてよきなり。

詮ずるところ、學問はたゞ年月長く、倦まず怠らずして勵み  
勉むるぞ肝要にて、學びやうはいかやうにてもよかるべく、さ



のみかゝはるまじきことなり。いかほど學び方よくても、怠りて勉めざれば功はなし。又人々の才と不才とによりて、その功いたく異なれども、才不才は生まれつきたることなれば、力に及びがたし。されど大抵は、不才なる人といへども、怠らず勉めだにすれば、それだけの功はあるものなり。又晩學の人も、勉め勵めば、思ひの外功をなすことあり。又暇のなき人も、思ひの外、暇多き人よりも、功をなすものなり。されば才のともしきや、學ぶことの晩きや、暇のなきやによりて、思ひくづほれて止むることなけれ。とてもかくても、勉めだにすれば、出来るものと心得べし。すべて思ひくづほるゝは、學問に大いにきらふ事ぞかし。

さてまづ上の如くなれば、學びのしなも、強ひてはいひがたく、學びやうもかならずしかくしてよろしとは定めがたく、又定めざれども、實は苦しからぬことなれば、たゞ心にまかすべきわざなれども、さやうにばかりいひては、初心の輩は、取りつきどころなくして、おのづから倦み怠る端ともなることなれば、やむことを得ず、今宣長がかくもやあるべからんと思ひとれるところを一わたりいふべきなり。然れども、その教へ方も亦人の心々なれば、我はかやうにてよかるべきかと思へども、さてはわろしと思ふ人もあるべきなれば、強ひていふにはあらず。たゞ己が教によらんと思はん人のためにいふのみなり。

そはまづかのしなくある學びのすぢく、いづれもく、やむことなきすぢどもにて、明らか知らではかなはざること



古事記  
三卷

國初から推古  
天皇に至る史

書

和銅五年（一

三七二）撰進

撰者太安萬侶

日本書紀

三十卷

國初から持統

天皇に至る史

書

養老四年（一

三八〇）撰進

撰者和仁等撰

なれば、いづれをも残さず、學ばまほしきわざなれども、一人の生涯の力を以ては、悉くは、その奥までは究めがたきわざなれば、その中に主として據るところを定めて、かならずその奥を究め盡くさんと、はじめより志を高く大に立てて、勉め學ぶべきなり。而してその餘のしなくをも、力の及ばんかぎり學び明らむべし。

さてその主としてよるべきすぢは何れぞといへば、道の學問なり。そも、此の道は、天照大御神の道にして、天皇の天下をしろしめす道、四海萬國にゆきわたりたるまことの道なるが、ひとり皇國に傳はれるを、そはいかなるさまの道ぞといふに、此の道は古事記、日本書紀の二典ふたみかみに記されたる、神代上代のもろゝの事跡の上に備りたり。此の二典の上代の卷々

を、くりかへしよく讀み見るべし。

すべての書ども、必ずしも次第を定めて讀むにも及ばず、ただ便りにまかせて、次第にかゝはらず、これをもかれをも見るべし。又いづれの書を読むとても、初心のほどは、かたはしより文義を解せんとはすべからず。まづ大抵にさらりと見て他の書にうつり、これやかれやと讀みては、又さきに讀みたる書へ立ちかへりつゝ、幾遍も讀むうちには、初に聞えざりしことも、そろゝと聞ゆるやうになりゆくものなり。さてその書どもを數遍讀む間には、その外の讀むべき書どものことも、學びやうも、段々に自分の料簡の出来るものなれば、その末の事は、一々さとし教ふるに及ばず、心にまかせて、力の及ばんかぎり、古きをも後の書をも、廣くも見ると、又簡約つひまかにして、さ



萬葉集  
二十卷  
奈良朝時代に  
成つた歌集  
撰者未詳

伊勢  
伊勢物語  
一卷  
平安朝初期に  
成つた物語  
作者未詳

源氏  
源氏物語  
五十四帖  
平安朝中期に  
成つた物語  
紫式部作  
うひ山ふみ  
國學書  
寛政十一年  
(二四五九)刊

のみ廣くはわたらずしてもありぬべし。二典の次には萬葉集をよく學ぶべし。みづからも古風の歌を學びて詠むべし。すべて人は、必ず歌を詠むべきものなる内にも、學問をする者は、尙更詠まではかなはぬわざなり。歌を詠までは、古への世のくはしき意、風雅のおもむきは知りがたし。又伊勢源氏その外の物語書どもをも、常に見るべし。すべて、みづから歌をも詠み、物語書なども常に見て、古人の風雅のおもむきを知るは、歌學びのためはいふに及ばず、古への道を明らかめ知る問にも、いみじくたすけとなるわざなりかし。

(うひ山ふみ)

### 二三 日本の魔法鏡

私は嘗て、理化學研究所にゐられた二神氏から、かういふ話を聞いた。

西洋の博物館には、よく日本の古鏡が陳列せられてゐるが、中には鏡背の模様が鏡面に現れるのがあつて、日本の魔法鏡ジャパニイニヤクツクミと呼ばれて珍重せられてゐる。尤も、現れるといつても、鏡面に直接見えるのではなく、鏡面から反射する光を白壁か白紙に當てて見ると、そこに現れるのである。ガラス製の鏡ならばとにかく、金屬製の鏡に於て、鏡背の模様が鏡面に現れるといふことはまことに不思議な現象で、「魔法」の名を得てゐるのも尤もなことである。——一體、かういふ古鏡が、現在には本元の

理化學研究所  
産業の發達を  
圖るため物理  
學及び化學の  
研究並びにそ  
の應用方面の  
研究を爲す財  
團法人組織の  
研究所  
東京市本郷區  
駒込上富士前  
町に在る  
二神氏  
二神哲五郎  
物理學者  
理學博士  
九州帝國大學  
教授  
愛媛縣の人  
明治三十二年  
生



日本にはあまり見出されなくて、却つて海外の博物館などに多く保存せられてゐるのは、明治初年に來た歐米人が、鮮明な映像を結ぶガラス鏡を持ち來つてこれと交換し、又は他にも多く例があるやうに、僅かな代償を以て蒐集し去つたものであるらしい。

しかし、魔法鏡といつたところで、今日の科學でその物理的説明がつかないといふわけではない。即ち、さういふ金屬製の鏡面が磨きに磨かれて異常に精緻な面に化せられるにつれ、その鏡背の模様の打ち出しによつて生じた分子移動の跡が、鏡面に現れるに至つたものであらうとせられてゐる。が、若しも我が國の古代に於て、かくの如き鏡が製作せられてゐなかつたとしたなら、近代文明といへども、恐らく「魔法鏡」を發

明することは勿論、かういふ現象を想像することも出来なかつたであらうと思はれる。

それならば、昔の人々は如何にしてかゝる精緻な鏡面を磨き出し得たかといふに、唯ベンガラと布片とを以て、人間の手で磨きに磨いたに過ぎない。今日に於ても、ドイツなどで製作せられる非常に精巧な學術用レンズの仕上げは、やはりベンガラを用ゐた手磨きで、技術のすぐれた職工の技になると、磨くといつたところで、その實質を減らすのではなく、唯分子の移動を行はせるのみであるといふ。そして、さういふ職工は一會社に一人といふやうに極めて少く、随つて後繼者が養成せられてゐない場合には、その死によつて會社そのものが成立たなくなる場合さへあるといふ。



これによつて思ひ合はされるのは、嘗てある物理學の教授から聞いた話である。それは、どんなに精巧な尺度を以てしても、それを使用する目と手が不確では正確な測定は出来るものでない。例へば、今幾十人かの學生に同じ木綿糸を與へて、一メートルづつ切り取ることを命じても、その結果に於ては殆ど同じ長さのものは出来ない。甚だしい場合には、一番長いのと一番短いのと、その差が全長の十分の一に及ぶことさへあるといふことであつた。

恐らく、この實驗の材料に細い棒とか針金とかを用ゐれば、測定の成績はもつと接近して來るのではないかと想像せられる。しかし、その結果が完全に一致することの困難なのは同様であらう。この事實を明らかに知らせるためには、伸縮

性に富んでゐて、それだけ扱ひ方による個人差の現れやすい木綿糸を用ゐるのが、適切な方法に違ひない。

今、この二つの事實について見るに、修練を重ねた人間の手や目が如何に精緻な働に堪へ得るものであるか、又その反對に、それを缺いた人間の手や目の働が如何に不確なものであるか、又、自然的に人間に與へられてゐる可能としての能力が現實としての能力として展開し實現しきるためには、どれほどの練磨が要せられるものであるか、まことに驚く外はない。近代科學の輸入以前に於ける我が國文化の發展は、大部分かういふ練磨の成果であつたといつても過言ではない。しかも、さういふ練磨も、唯目や手のみのことではなく、その基礎として、先づ心身を整へることが必要とせられ、更に平素に於け



る絶えざる全人的精進と生活の統制とが必要とせられた。かくて一口の刀を鍛へるにも、神に仕へる如き潔齋を以てし、一箇の茶碗を焼くにも、全心身を賭けるほどの集中が行はれ、そこに一種の「道」の成立をさへ見たのであつた。

然るに、近代科學の輸入以來、器械的製作の勃興と、文化の全面に互る科學的方法の擡頭とは、かくの如き傳統としての自己鍛鍊の意義を見失はしめ、爲に、道としての全人的な練磨や、宗教的な精進潔齋は、過去の迷信的遺物として殆ど忘れ去られるに至つたといつてよい。固よりかうした自己鍛鍊は、そのある部分は、當時の人々がまだ科學的な知識なり方法なりを所有しなかつたために拂はせられた努力であつたに違ひない。随つて、科學の輸入發達によつて、それが漸く免除せら

れて來たといふ事實も認められなくてはならない。しかし又、如上の事例が示すやうに、如何に正確な用具を以てしても、それを使用する手や目が練磨せられてゐなければ、その用具の効果をさへ十分に收めることが出來ない事實、又さういふ精進練磨の至り極まつたところには、時に今日の科學も及び難いやうな成果を收め得てゐる事實をも見逃してはならないと思ふ。往々、我が古昔の刀工や窯工の作品に見られる獨得な牙えや濫味には、單なる手作りの爲の不器用さや歪みから來た偶然的な効果ではなく、製作者がひたすら技を磨き、自己を鍛へることによつて生じた、必然的な個性美であるとしなくてはならないものがある。——聞くところによれば、近代に於ける精巧な機械の一つである時計にしても、現代の機械



によつて製作されたものよりも、以前の職工の手作りのものの方が遙かに狂が少いといふ。

かく考へることに甚だしい誤がないならば、科學の眞の發達は、決して道としての精進練磨を不用ならしめるものではなく、又道としての精進練磨は、決して科學の發達と矛盾するものでもない。それどころではなく、恐らくヨーロッパ文化に於ける科學發達の基底にも、對象認識や科學的技術の基礎としての主觀の調整や自己鍛鍊が、どんな形でか存立してゐたに違ひない。唯、東洋、わけても日本文化の發達に於ては、さういふ自己鍛鍊の側面が著しく自覺的に發達させられ、方法的にも確立せられて一つの傳統を形成したものであつたのである。随つて、この兩者が相俟ち、科學研究はかくの如き傳

統としての自己鍛鍊の上に立ち、傳統としての自己鍛鍊は科學研究の上に働くに至つたならば、——そして、現代の經濟組織の要請たる大量生産とも調和し得るに至つたならば、必ずやこゝに兩者の新しい發展が期せられるであらう。

かくして、傳統的なるものとしての自己鍛鍊と現代的なるものとしての科學との結合による、いはば科學道ともいふべきものを樹立し、新しい日本文化を創造し、世界文化の上に一大進展を與へることは、現代の我々に課せられた最も重大な、最も有意義な任務の一つではあるまいか。



國語卷五終

昭和十八年七月十六日  
昭和十九年八月九日  
昭和二十年十二月十八日  
昭和二十二年六月三十日  
新訂第二版發行  
新訂第一版發行  
新訂第一版發行

國語

定價各册金五十五錢

編輯者

岩波編輯部  
代表者 岩波茂雄

發行者

東京都神田區岩本町三番地  
中等學校教科書株式會社  
代表者 山本慶治

印刷者

東京都神田區錦町三丁目十一番地  
精興社印刷所  
代表者 白井赫太郎  
(東京四)

發行所

東京都神田區岩本町三番地  
中等學校教科書株式會社  
日本出版文化協會會員番號 一一七五二二

(略名) 岩波編國語

配給元 日本出版配給株式會社  
東京都神田區淡路町二ノ九



三年五祖子書

蘇東俊



